

★★**ドリームガジン**★

2D DREAM

18
未満

2017 **12** Volume.97
DIGITAL EDITION

今号の特集
Special Fetishism Series

秋の夜長のお供に
戦うヒロインを!

32ページ増量
特大号!



ぱふえ
大林森
孫陽州

カラー
ピンナップ
COLOR PRIZE



(表紙&ピンナップテレホンカード)
応募者全員サービス

【えっちマンガ】
楠木りん
時丸佳久
ぱふえ
とけうさぎ
成海優
SHUKO
嘉納あいら

【連載&読み切り小説】
天戸祐輝×江森うき
ウナル×蒼泉
黒名ユウ×かん奈
あらおし悠×はらいた
木森山水道×ミルクセーキ
上田ながの×孫陽州

『魔剣士リーネ2』

酒井仁×桐島サトシ
原作：まぐらカバソフト

『装刃戦姫サクラヒメ』

有機企画×緑木邑

『アナスタシアと7人の姫女神』

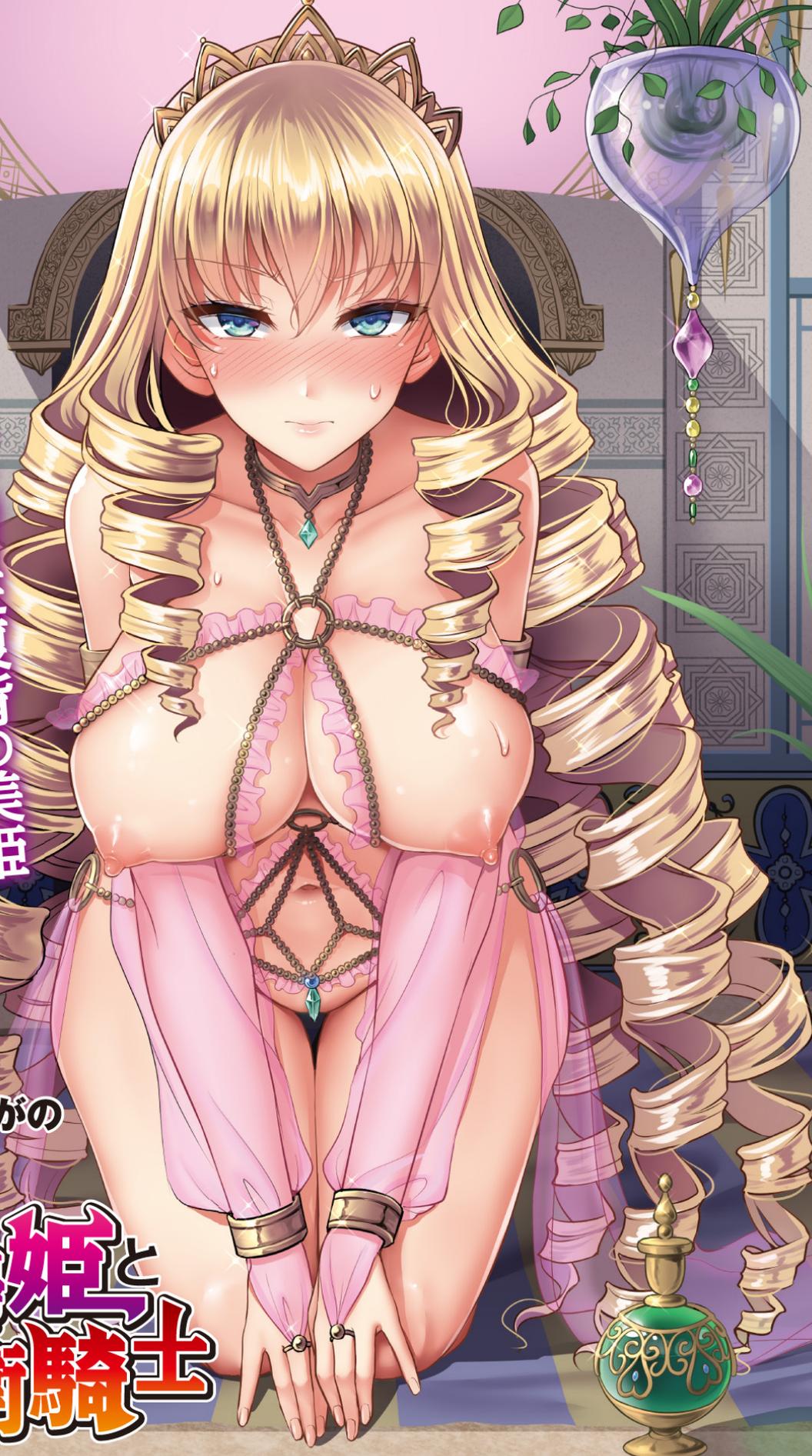
筑摩十幸×くろいわしんじ
原作：桜沢大

娼婦

軽蔑すべき相手に媚びながら、
対価を求めて肉体を売る乙女たち!

試し読み版

娼婦へ貶められた面従腹背の美姫
家臣の前で売る身体は牝の熱を帯び……



小説 うえだ 上田ながの
挿絵 そんようしゅう 孫陽州

娼婦姫と近衛騎士

「リズナ……キミは行くんだ」

カナルチュカ王国山中にて、近衛騎士フィルルイナルは守るべき自分の主人カナルチュカ王国第一王女リズナアスナスカナルチュカに静かに告げた。

追っ手が迫っている。王都を落とし、王城を焼いたアプハズラ帝国の手の者達が……。捕まれば終わりだ。リズナだけでも逃がさなければならぬ。

「でも、私だけなんて……」

「リズナ……頼む」

真っ直ぐリズナを見つめる。

その視線にリズナは「……分かったわ」コクッと頷いた。

「ありがとう」

「でも……その前に……」

一言呟く。それと共にリズナはそつとフィルへと顔を寄せてきた。金色の髪が、碧い切れ長の瞳が目の前に……。

そして、二人はチュッと唇を重ねた。

「好きよ。フィル……」

「リズナ……」

二人は見つめ合う。

「ああ、俺もだ」

乳兄弟とせずと一緒で過ごしてきた。でも、身分が違う。だからその想いはずつと隠してきた。でも、告げる。自分の想いを。だって、リズナも伝えてくれたから……。

「死なないでね」

「ああ、もちろんだ」

必ず生きる。生きてリズナと……。

そんな想いを抱く。その刹那——

「見つけたぞおおお！」

敵兵の声が響いた。

それに応じる様にフィルは剣を抜く。姫を——好

きな女を守るために……。

だが、無数の敵に対し一人の力など無力であり、フィルは結局捕らわれることになってしまった。リズナと共に……。

*

「カナルチュカ王女リズナ——貴様は余の所有物となつた」

アプハズラ帝国帝都皇宮玉座の間にて、リズナに対して一人の男——皇帝バズールロードアプハズラが告げる。

（ふざけるなっ!! 姫様は……リズナは……貴様などの所有物ではないっ!!）

リズナと共に引き立てられてきたフィルは、憎悪の視線を皇帝へと向けた。しかし、言葉を発することはできない。首につけられた奴隷の首輪の効力のせいだ。この首輪をつけられた人間は、設定された主人の命令には絶対服従を強いられる。主人に話してよいといわれなければ言葉を発することさえできないのだ。

だからこそ、呪むこととできない。フィルはどこまでも無力だった。

「貴様にはこれより余のために役立つ仕事をしてもらうぞ」

フィルを無視してバズールはリズナに語り掛ける。

「貴方の役に? 何をさせるつもり?」

リズナは一歩も引かず、バズールを睨んだ。視線だけでも殺せそうな程の憎悪を込めながら……。

「簡単なことだ。貴様には娼婦となつてもらう」

「——なっ?」

「我が帝国は侵略により肥大化した。故に、国内にも敵が多い。例えば侵略国の貴族や国民共などだ。そういつた連中を懐柔せねばならない」

「……まさか……」

リズナは察しがいい。すぐにバズールの意図に氣

付いた。それはフィルも同様だ。

（カナルチュカの人間にリズナを抱かせるつもりか）

「……思っているとおりで」

心を読んだかの様にバズールは笑った。

「帝国に従えばかつて主人と仰いだ姫を抱くことができる。素晴らしいだろう? そういうわけだ。貴様は娼婦となつてもらう」

「……そんなことできるわけが」

「拒絶は死を意味する」

「その様なことをするくらいならば……」

「いつそ死を選ぶか? なかなかの心構えだが、いいのか? 貴様の後ろにいるその男も死ぬことになるぞ」

「——なっ?」

フィルへとバズールは視線を向けてくる。

「安心しろ。永遠にというワケではない。これでも余は慈悲深いからな。飽くまでも貴様は娼婦だ。つまり、身体を抱かせる代わりに金銭を得ることができる。その金で……自由を買うことも可能だ。因みに貴様の借金は貴様を捕らえるためにかかった金銭になる。金額は……」

バズールが告げた金額は、凡そ常識的なものだった。それこそ、頑張り続ければいつか返せるのではないかと思える程度の……。

「さあ、どうする?」

ジッとバズールはリズナを見つめる。

リズナはその視線に迷いの表情を浮かべたかと思ふと、フィルを見つめてきた。

どうすればいい? そんなことを問いかける様な視線だ。

だが、フィルには答えることができなかった。リズナが娼婦になる姿など見たくはない。けれど、断れば死ぬこととなる。彼女には死んで欲しくない。生きていて欲しい。

生きていて欲しい。

「分らない。どうすれば……」

絶望しかない。

そんなフィルをしばらく見つめ続けた後、リズナはうつすらと笑った。

その笑みは――

「二人で自由になろう。大丈夫。大丈夫だから……」

そう告げてきている様にも見えるものだった。

そしてリズナは向き直る。改めてバズールを見つめると「分かったわ」そう短く答えた。

「いい返事だ。では、早速仕事をしてもらおうか」

実に嬉しそうにバズールは笑うと、パチンツと指を鳴らした。

すると一人の男が玉座の間に入ってきた。

「……なっ!!」

「そんなっ!!」

その男を見た瞬間、フィルとリズナは二人同時に驚きに瞳を見開くこととなった。

「お久しぶりです姫様」

男が笑う。

名はファザトⅡアルデルヒルドルフ――カナルチユカ王国において宰相の地位に就いていた男である。

「ファザト……貴方は裏切っていたのですか？ 父上を……カナルチユカを!!」

ファザトと共に皇宮内に用意された一室に入るなり、リズナは声を荒らげた。

リズナだけじゃない。共に連れて来られたフィルも、ファザトを睨む。

「まあそういうことですな」

敵意などものともせずファザトは笑う。

「貴様あああつ!!」

フィルの腰には剣が下げられたままだ。怒りのま

ま引き抜こうとする。しかし、身体は動かない。自

由は奪われたままだった。

「このっ!!」

リズナが手を振り上げる。

「止める」

短くファザトが呟いた。刹那、フィルの身体が勝手に動き、振り上げられたリズナの首を掴んだ。

「なっ!!」

「……姫様の客は私の様な有力貴族や、大商家などいわゆるVIPと呼ばれる人々ばかりです。故に、護衛が必要だ」

（まさか……）

「フィル……お前が想像しているとお前だ。お前の主人は姫様の客だ。私の命に逆らうことはできないというわけだよ」

（くそ……クソやろうっ!!）

絶望的な宣言だった。

「さて……色々説明も終わったところです。早速始めましょうか」

「は……始める？ 何を？」

「もちろん……セックスですよ」

「そ、そんなこと……」

「できますよね？ 断るのであれば……そうですね。フィルに自害を命じても構わないのですよ」

「それは……」

「くく、立場が理解できたのなら、まずはこれに着替えて下さい」

呆然と立ち尽くすリズナに対し、ファザトが取り出したのは薄い下着の様なものだった。半透明の生地。身に着けたところで乳房や秘部を隠すこととはできないだろう。まさに娼婦に相応しい衣装というべきか……

「そんなもの……着れるわけが……」

「拒否権はありませんよ」

「う……くう……」

屈辱にリズナは齒噛みする。

「くそっ！ くそっ！ くそおおっ!!」

殺したい。殺してやりたい。この場でファザトを撫で切りにしてやりたい。だが、フィルの身体は動かない。

「早くして下さい」

ニヤつきながら更に指示を下す。

「……せめてフィルには外に……」

そんな彼に対し、リズナは消え入りそうな声で呟いた。

「駄目ですよ。彼は私の護衛なんです。ですから、室内にいても構いません」

どこまでも無慈悲だった。

「……分かったわ」

何をいっても無意味だろう。願いは届かない。それを理解したのか、コクッと頷きつつ、リズナは「ごめんなさい」と口にする共に、自分のドレスに手をかけた。

ゆつくりと脱ぎ捨てる。白い肌が露わになった。純白のコレットとブラ、そしてショーツが剥き出しになる。

（……リズナ）

初めて見るリズナの素肌。見惚れそうになるほど美しい。豊かな胸に、ブリッと張りのある尻。柔らかな素肌――実に魅力的だった。

だが、見惚れることはできない。感じるものは悔しさと無力感だけだった。

「美しい身体です。実にイイ。ああ、我慢できなくなりそうだが、それだけではダメです。さあ、下着も脱いで下さい」

「……いわれなくても……」

口惜しそうな表情を浮かべつつ、今度は下着にも手をかけ、躊躇いつつもリズナはそれを脱ぎ捨てた。たゆんつと乳房が弾む様に剥き出しになる。大きな胸だ。掌には収まりきりそうにない。白い肌に彩

新ヒロインはお嬢さま騎士!?
新たな装刃戦姫!
コーデリア見参!!

装刃戦姫
サクラトモ
フタナリ淫獄に堕ちる黒髪乙女

第五回 恥辱に喘ぐお嬢さま

小説 NOVEL 有機企画 挿絵 ILLUSTRATION 緑木邑

登場人物紹介



建宮流華

日本対魔協会に所属する戦姫。「装刃戦姫サクラヒメ」に転身し、人に仇なすオニグミを滅殺する

鬼蛙

オニグミを束ねる幹部。蛙坂蔵夫という名で流華と同じ学園に通い、彼女を徹底調教する。

三城良平

流華の幼馴染みにして恋人。戦闘能力はないが、彼女を精神的に支える心やさしき少年。

前号までのあらすじ

人に仇なすオニグミと戦う装刃戦姫サクラヒメこと流華。対魔協会最強と謳われていたが、鬼蛙の罠にかかり敗北してしまふ。股間にペニスを生やされ、地獄のようなフタナリ調教を強いられるのであった……。

転校生が来る。退屈な日常に飽きたクラスメイトたちは色めき立ち、教室は朝からその話題で持ち切りだ。
流華と良平もご多分に漏れず、おしゃべりの真っ最中である。

「どんな人だろうね。海外からの留学生って噂だけだ」

「特に興味はないが来るなら男の方が好ましい」

「どうして？」

「腕試しができるだろう？ 一度異国の猛者と手合わせてみたいと思っただけだ」

「もう、流華はすぐ戦い始めるんだから。そりゃばくだつて剣道部に入ってくれる人がいいけどさ。最近、蛙坂くんも顔を見せないし」

「……あいつはどうせ仮病だろう」

「前から思っていたけど流華と蛙坂くんって仲悪いよね。何かあったの？」

「別に何もない！ あいつの顔が気に入らないだけだ！ ……もう席に戻れ。すぐに先生が来るぞ」

良平は戸惑った様子で席に戻る。つい感情的になつてしまったことを黒髪乙女は反省した。

(良平……ごめん)

自分が蛙坂の雌奴隷なんて絶対に知られるわけにはいかない。電話の件はどうにか誤魔化すことができたが、そう何度も同じ手は使えないだろう。フタナリの上に乱交好きの変態だと知られたらお終いだ。

しばらくすると担任が現れ、生徒たちに着席を促す。蛙坂は病欠すると連絡を入れたようで、まだ姿を見させていない。

(あいつがいなくて心がざわめく……いや、ただの気のせいに決まっている！)

少しずつ鬼蛙に惹かれていた自分が怖い。ゲーム研究部で人間の醜悪さを見せつけられ、戦う理由がぼやけていく。良平や人々を守らなければいけないのに。

と、迷う黒髪乙女を他所に、転校生が姿を見せた。「おお、すげえ！」「やつた、マジかよ！ ラッキィー！」「チョー美人じゃん！」

男子生徒たちから喜びの声が上がる。転校生は女子生徒で、今花開いた薔薇のごとく、美人だったからだ。

「おはよう。みなさん」

ブロンドヘアを白いカチューシャで纏め、胸の高さに揃えた毛先をロールさせている。瞳は蒼く上等なアンティークドールのような。

スタイルも抜群で、豊かに実った双丘がブレザーの上からでもわかるほど自己主張し、男子生徒の視線を釘付けにしていた。

ウエストはキュッと引き締まり、ヒップは大きくふくよかで、意図せずとも雄の欲情を煽ってしまうボディラインだ。

転校生はチョークを手に華麗な手さばきで名前を書くと、自信満々に言い放った。

「はじめまして庶民のみなさん。クリスティーナ・

エイミスですわ。わざわざクソ田舎に転校してあげたことを感謝さない」

流暢だが品のない日本語で、いきなりのお嬢さま宣言。勝気で高慢な性格がありありと伝わってくる。クラス全員があつげに取られ、男子生徒一同の甘い妄想は一瞬にして打ち砕かれた。

(なぜあいつがここに!! あとでくわしく事情を聞かないと)

ただ一人、流華だけは困惑の色が違った。珍しく自分と同種の生き物を見つけたように。

授業は問題なく進み、休み時間。案の定誰も転校生の傍に近寄ろうとはしない。

(都合だ。今の内に話を――)

しかし、遠巻きに見つめるクラスメイトの輪から離れ、一人で空白地帯に近寄る男子生徒がいた。お人よしの少年が。

「はじめまして三城良平です。エイミスさん校舎の案内はまだじゃない？」

「けつこう。わたくしに声をかけるなんて変わり者ですわね」

「余計なお世話だったかな？」

「ええ、まったく。でもまあ……無駄に時間を取られるのは利口ではありませんわね」

ブロンドヘアをかき上げると、悪戯っぽく微笑む。

「いいでしょう。特別にわたくしの傍で案内することを許しますわ。ついてらっしゃい」

「わっ、エイミスさん!!」

「クリスでいいですよよ良平」

良平の手を引くと、一切の躊躇なくドアへ向かって歩いていく。

「まてまてまてっ、勝手に話を進めるな！ 校舎の案内ならわたしがする！」

流華は慌てて呼び止めた。聞きたいことは山ほど

ある。それに恋人が振り回されているのを黙って見過ごすわけにはいかない。

「あら、お久しぶりですわね流華さん。もしかして良平くんのお友達？」

「彼女だ！ 最初から気付いていただろう。まったくしらじらしい」

「りゅ、流華声が大きいよ」

小柄な少年は顔を赤くする。つきあっているのは周知の事実だが、改めて大きな声で宣言されるとやはり恥ずかしい。

立ち話をしていた学園生たちは「へえ、面白そうだな」「なんだ修羅場か？」と興味深々だ。

一方、クリスは外野のことなどお構いなしといった様子で、

「それは失礼。ですが案内はこのまま良平くんにお願いますわ。あなたの聞きたいことはまたあとで」

「つ……だ、だったらわたしも同行する！ いいな二人とも！」

「ぼくはいいけど」

「お好きにどうぞ」

そうして案内は三人で行くこととなった。途中流華とクリスが口論になり、結局昼休みを含む休み時間のすべてを費やしてしまった。

最後に体育館を案内して教室に帰るところで、クリスが流華に向かって話しかけた。トーンを落とし今日初めて表情が真剣になる。

瞳が氷のような冷たさを帯びた。

「あなたの疑問にお答えしますわ。放課後屋上に来てもうえないかしら？」

「わかった。生徒会の仕事が終わってからでもいいか？」

「問題ないですわ。紅茶でも飲んで待っています」

丁寧にロールされた毛先を弄びながら、クリスはうなずいた。

放課後。校舎屋上。

青黒くなった空の下で、流華とクリスは対峙する。二人以外の人影はなく、夕暮れの生ぬるい風が頬を撫でる。

「軍刀直入に聞く。なぜ日本にいるんだ？」

「まったく、ずいぶん言いぐさですわね。欧州悪魔殲滅戦では散々わたくしの力を借りておいて」

「わたしが力を貸してやったの間違いだろう。フツ、昔と変わらなずブライドの高いお嬢さまだ」

「そちらこそ相も変わらなずクソ真面目ですわね。彼氏さんの苦勞が偲ばれますわ」

流華とクリス、二人は装刃戦姫として、共に人類を守ってきた。出会った当初はぶつかかることも多かったが、数々の戦いをくぐり抜け、今では親友と呼べる仲だ。

「話を戻しますわね。日本に来た理由、それは『八大鬼、鬼狐』を追ってきたからですわ。わたしの国で大分好き勝手しやがりましたから」

「学園に来たのもそれが理由か？」

「いいえ、そちらは別件ですわ。日本の対魔協会から連絡がありましたの。ここ数週間、あなたの様子がおかしいと。はつきり言うと言と監視ですわね」

「そ、それは……」

雌奴隷にされたことを知られる恐怖。情けなく恥ずかしくて、とても口には出せない。

「別に何でも、ない。協会の思い違いだろう」

「嘘が下手なもの変わりませぬわね。どうやら訳ありのようですし。ま、いいですわ。代わりにこちらの方たちから聞きますから！」

クリスは胸元からダーツを取り出すと、貯水タンクの上方に投擲した。

直後、虚空が歪み無色透明な空間からオニグミが姿を現す。土でできた巨体を操る土愚鬼と、スーツ姿で糸目の霧幻鬼だ。彼らも流華の動向を監視する

ために、屋上で見張っていたのだ。

「他は装刃戦姫がいるなんて聞いてねえぞ。兄貴に報告した方がいいんじゃないか？」

「同意見です。面倒なことは勘弁ですわね」

鬼蛙への報告を優先し、この場から離脱しようと跳躍を試みる。だが、タンクを踏みしめたところで動きが止まった。

屋上全体が紅く染まり、封鎖結界が展開したのだ。結界を生み出した張本人は、蒼く輝く神器結晶を胸元から取り出し、不敵に微笑む。

「むざむざ獲物を逃がすと思っていますか？ わたくしの目に留まった時点で、あなたたちの死は確定していますのよ！ 神器……転身！」

クリスの言葉に応じてサファイアブルーの光が放たれる。

制服が分解されるとピッチリとしたスーツに再構築。光がスラリとしたボディラインをなぞるように裸体を包む。

その上から羽毛のように軽量で装飾を施された、銀のアーマープレートが装着され、靈力を増幅し身体機能を高める。ブルーのミニスカートが風にひらめき、隙間から見える太腿が悪鬼をも魅了する。

最後に豪奢なレイピア「エスペラーダ」を掴み、切っ先を焔めかせ名乗りを上げた。

「人に仇なす悪魔たち！ その魂を煉獄で清めなさい！ わたくしの剣は魔を討ち刻む光！ 装刃戦姫コーデリア、ここに見参ですわ！」

土愚鬼、霧幻鬼は転身した姿を見て、警戒レベルをさらに引き上げた。コーデリアから発せられる靈力が全快のサクラヒメと同等か、それ以上であることを悟ったからだ。

「クソッ、装刃戦姫かよ」

「想定外の事態ですわね」

「流華さんに何をしましたの？ 三秒以内に答えなさい」

「ハアツ!? 兄貴の命令で彼氏を人質にしているだけだつーの。出世のチャンスを邪魔するんじゃないやえ!」

「こつ、この馬鹿!」

企みを仲間が明かしてしまい、霧幻鬼は頭をかかえる。

「なるほど人質ですか。品性下劣なクズ虫らしいやり口ですわね。でもそのカードを使ってこないということは、『兄貴』以外が良平くんを害を及ぼすことはできないようですわね」

「それがどうした! やるならやっつけてやるぜ!」

「まったく……戦うしかなさそうですわね」

「話が早くて助かります。バラバラにして差し上げますわ」

三者の視線が交差し一秒後、コーデリアはしなやかに跳躍し、土愚鬼の元へ跳んだ。

「ハアツ!」

「おらあああああつ!」

土愚鬼は大きく拳を振りかぶり、コーデリアを狙う。直撃すればコンクリートも粉々に粉砕する一撃だ。しかし――

「遅い。遅すぎますわ。そんな速度でわたくしと戦うつもりですか?」

「エッ……エ……ヘエッ!」

土でできた巨体が一呼吸の内に切り刻まれ、サイロステークのような細切れで崩れ落ちる。エスペラーダを用いた、目にも留まらぬ早業だ。

土愚鬼の肉体が茶褐色の体液をまき散らしこの世から消滅する。

「……速さが自慢ですか」

まったく知覚できない動きを見て、霧幻鬼は全包围に呪力の霧を展開した。触れれば骨まで溶ける魔

の霧だ。

慎重な霧幻鬼らしい判断だが、コーデリアはその作戦を一蹴した。

「あなたアタマが悪いですわね。見えている地雷に近づく敵がいると思いませんか?」

「何っ!?!」

「フィニッシュムーブ! クイーンアンストラッシュッ!」

コーデリアが叫ぶとエスペラーダの鏢が薔薇のごとく開き、切っ先から霊力を束ねて撃ちだした金色の光線が凄まじい速度で迫る。

「……ッ!!」

大気が震え、霧幻鬼を消し墨に変換する。魂が消滅し断末魔すら残さず討滅された。

コーデリアは軽く身だしなみを整えると、流華に向き直る。

「これで二体撃破ですわね。良平くんのためなのでしようけど、装刃戦姫としての自覚が足りないのではなくて?」

「うっ、……すまない」

「まったくですわ。コレを外すのも案ではないのでしてよ」

そう言つてコーデリアは、サッカーボールサイズの塊、爆震蟲を床に転がした。

校舎を見回っていた時点で、すでに外していたのである。起爆よりも速く解除できるコーデリアにしかできない神技だ。

「コーデリア、本当に……本当にありがとう。わたしは何もできなかった。良平を見捨てるなんてできなかったんだ……」

「オニグミに従っていたことは不問にして差し上げますわ。あなたの泣き顔なんて滅多に見られるものはありませんから」

顔をくしゃくしゃにして涙を流す流華を、コーデ

リアはそつと抱きしめた。境内の戦いから初めて流す安堵の涙だ。

「ところで『兄貴』と呼ばれているオニグミを呼び出すことはできますの? そいつがあなたを苦しめていた張本人なのでしょう?」

「可能だとは思いますが八大鬼の一体、鬼蛙だぞ。一筋縄ではいかん」

「むしろ好都合ですわ。妖月の前に八大鬼と戦っておきたかったですから。わたくしが鬼蛙を倒せば全部問題が片付きますわね」

「ああ、もちろんわたしも協力する」

流華が胸元から神器結晶を取り出した瞬間、封鎖結界の一部がスッポリと切り取られた。外から現れた闖入者、それは今まさに話していた鬼蛙だ。

巨大な蛙の姿で、手には鎖鎌をたずさえている。仲間の死を知ったのか、目には静かな怒りが浮かんでいた。

「鬼蛙! 貴様……っ!」

「やあ流華、それと異国の装刃戦姫コーデリア……鬼狐に処理してもらいたかったけど、そうもいかなさそうだね」

「あら、早いお着きですこと。あの二体と同じく討滅されたいようですわね。神様に祈るなら今の内でしてよ?」

「ボクに祈る神はいないけど、土愚鬼と霧幻鬼の仇は取らせてもらおうよ」

「やっつてみなさいっ!」

コーデリアの言葉を合図に、両者は風のごとく駆ける。残像が残るほどの速さで、エスペラーダと鎖鎌が打ち合わされた。

人間の目には何も無い空間で火花が散っているようにしか見えないが、確実に死闘が行われているのだ。

「くっ……さすがにやりますわね」

「いい剣さびさだけど一撃一撃が軽いね。それじゃボクは倒せない」

スピードではコーデリアが勝っているが、鬼蛙は長年の技巧でスベックの差を埋めていく。決め手を欠くコーデリアは、じわじわと追い詰められていく。

「ぐうっ、あああああああつ！」

「その首、落とさせてもらおうよ」

フェンスにぶつかり、苦悶の声を上げるお嬢さま

戦姫。鋭利な刃が喉笛に迫る。

「そこまでだ鬼蛙！ハアアアアッ！」

「サクラヒメ……ごっつ、ゲホッ！」

風明刃を中段に構え、サクラヒメが横合いから切り込む。不意を突かれた鬼蛙のわき腹から濁った血が飛び散った。

「助かりましたわ。腕は鈍っていないようですわね」

「一気に決めるぞコーデリア。悪鬼め塵芥に還るがいい！」

形勢は逆転し、サクラヒメとコーデリアの剣閃が鬼蛙を追い詰める。醜い皮膚に幾筋もの刃が奔り、噴水のように体液が噴き出した。

「がっ、ぐう……ゴホッ！ やるねキミたち……」

「二対一はキツいかな」

「まさか卑怯なんて言わないですわよね？」

「とどめだ鬼蛙ッ！」

二人の装刃戦姫は靈力を解き放つ。凄まじいまでの斬撃が悪鬼に直撃する。

「討滅奥義！ 花鳥風月・百八式!!」

「フイニッシュムーブ！ クイーンアンスラッシュッ！」

「グアアアアアアアアアアアアッ!!」

全身を切り裂かれ倒れ伏す鬼蛙。もはや妖魔の姿を保つこともできず、蛙坂のまま血反吐を吐く。

「父さまと母さまの仇、討たせてもらおうぞ」

「……サクラヒメ」

夕陽に照らされ紅く煌めく刃が、鬼蛙の首筋に触れる。積年の怨みを込め、柄を握る手に力がこもる。「キミに殺されるなら本望さ。できれば一撃で殺してほしいけどね」

死を覚悟したのか鬼蛙はいつもと同じ、根暗な笑みを浮かべる。だが、そこから風明刃が動くことはなかった。

「何をしていますの!? 早くトドメを刺しなさい！」

「わ、わかつている！ わかつているんだ！」

コーデリアの言葉は聞こえている。それでも、大太刀は動かない。

「一体どうしたんだわたしは!! まさかこんな奴に絆されるわけが……」

自分でも理解できない感情にサクラヒメは戸惑う。あれだけの辱めを受けた相手に同情する理由はないはずだ。

「装刃戦姫の使命を忘れましたの？ あなたがやらないのなら、わたくしが討滅しますわ」

「ああ、その通りだ。鬼蛙……これで終わりだ！」

迷いを振り払い風明刃を握り直す。白刃が首の肉に食い込み――

「そこまでしな。この坊やがどうなってもいいのかい？」

切断することはなかった。

音もなく気配もなく「八大鬼、鬼狐」妖月が現れたからだ。四尾の狐の姿で、その指は三城良平の首にかかっている。

「良平！ 貴様……その手を離せ！」

「妖月！」

「まさか卑怯とは言わないだろうねえ。坊やを助きたいなら武器を捨てな」

思わぬ敵の襲来に二人の装刃戦姫は唇を噛む。

また人質を取られては手が出せない。

「流華……クリスさん……」

「わかった武器は捨てる。だから良平を傷つけないでくれ」

「……仕方ありませんわね」

風明刃とエスペラータが手のひらから滑り落ち、虚ろな音色を響かせた。

「わかればいいのさ。わかればねえ。ふふ、ゆつくと眠りな」

「うぐっ、くう……貴様……」

「あとで覚えておきなさい……」

尻尾から噴き出る毒の霧でサクラヒメとコーデリアの意識は闇に沈んでいく。無力化できたことを確かめると妖月は鬼蛙に向かって、

「いい様だねえ鬼蛙。ほおら、忠告はちゃんと聞いておくものだろう？」

「鬼狐、悔しいですが助かりましたよ」

「妖月と呼びな。それで、あなたの計画を聞かせてもらえるかい？ お仲間が二人もいなくなっちゃってさびしいだろう？」

「まったくずる賢いですね。さすが女狐」

「当然さ。あたしが八大鬼になったのは面白い見世物を見物するためだからねえ。あなたの野望に一口乗らせてもらうよ」

口角を三日月のように歪ませると、二体のオニグミ幹部は夕闇に嗤う。今度こそ装刃戦姫を屈服させオニグミの悲願を叶えるために。

◆◆◆

天井から落ちた水滴が頬に当たり覚醒を促す。装刃戦姫コーデリアは薄暗い部屋の中で目を覚ました。目立つた外傷はないが、思考がぼやけ考えがまとまらない。薄く開いた瞳であたりを見回す。

「ここは……」

目に映ったのは自分を取り囲む石壁と石畳。さながら中世の牢獄めいた時代錯誤な空間だ。

身体を動かそうとするがうまく動かせない。何か

目覚めると...
触手地獄!

ん...んん

粘獄のリーゼ

淫罪の宿命 第6話 旧文明廃棄施設

漫画
COMIC

くすのき
楠木りん

りんどう
原作 竜胆

な...なんですか
これは...!

くっ...はあ

ずっと
動いて
止まらない

触手が
うごめいて...

ん...んん
ん...んん

フオフオフオ
ワシの研究結果は
愉しんでもらえて
おるようじゃの？

貴方が
ベゼリオン
ですの…ね

こんな下品な
研究を…んっ
してたなんて
失望しましたわ

フオフオ
これは戯れよ

さて
ワシの施設に来た
お主の目的や
組織の事

あのイバラの
姉妹の事も
洗いざらい
喋ってもどうぞ

ふふ…
わたくしが
そう簡単に…

口を割ると
思っ…ん
ますの…？

負けませんわ！

リーゼ様の
負担をかけて
しまう事だけは
できない！！

へえ…

ここが旧文明の
廃棄施設ねえ



それにしても
光流は
どうしたかしら

あの子に
出し抜かれ
ちゃったから
こっちも
急がないと…



ふん
まあいいわ
ともかく
手がかりを
探さないと



見られてる…
わね…

魔物の
気配はない
だけど
嫌な感じは
する



何度も何度も
擦れて…!

カ
ズルル

もうそこは
やめてえ…!!

フオフオ
明確な好反応の
ようじゃな
濡れて
きおったわ

クッ…

じわ



なっ 何これは!?



こっ これくらい
何とも
ありませんわ



もちろん
そうかと
思ってな
貴公専用の
責め具を
用意しておる



胸...
吸われ
てるッ!?

こんな...
激し...!

ひゃん!

おははは

びびび

おははは



あぁっ!
ふぁ…ん

その反応だと
効果有りじゃな

小娘よ 性器と胸
どちらの刺激が
甘美なのかのお?



液が!?
胸が…じんじん
する…!?

その液は
自白剤も兼ねた
強力な媚薬よ



くふ…
や…やめ…
あああ!!



な…なんて
俗な質問…!
どちらも良いわけ
ありませんわ!

ほお
刺激が足りないとい
うわけじゃな?

ならば
もう少し強く
してやるわ!

アッ
!?

ミッパル

アッ



囚われた弟を救うために自らの身体を売り、
女騎士は淫欲へと委ねていく！

娼婦騎士ケイナ

～この身が穢れようとも～

小説 **ウナル**
NOVEL
そうせん
挿絵 **蒼泉**
ILLUSTRATION

この小説には分岐が設けられています。シーンごとに1~5の番号がふられていますので、シーン1の末尾にある選択肢を選び、ストーリーをお楽しみください。

【シーン1…ケイナの決断】

メンサ王国とファガス公国。長きに渡る二国の戦いは今日でも続いている。

戦いの原因を知る者はもはやいない。血に血を塗り重ねるような歴史は修復不可能なほどの軋轢を二国に作ってしまったのだ。

そんな戦場に、一人の女性の姿があった。

「隊長！ 敵が防衛隊を突破、こちらに突撃してきます！」

部下の報告を受けて、ケイナは切れ長の目をゆっくり開けた。

丘の上からは戦場となっている平原がよく見渡せる。ファガス公国の敵兵たちはこちらの隊を押しつけ怒涛の勢いで本陣に向かって来ていた。その装備は一人一人マチマチでおそらく傭兵部隊と思われる。誰もが鬼気迫る表情で目を開き、ケイナの姿を一点に見ていた。

「騎士隊長ケイナ・ディエーナ！ あいつを倒せば報酬は思いのままだぞ！ いくぞ野郎ども！ メンサ王国のクンどもを皆殺しだ！」

怒声を上げて敵部隊が加速する。彼らもまたケイナを知っているのだ。

それも当然だろう。二十五歳という若さで部隊を任される知将。そして、その美しさも折り紙付きとなれば容姿

が知られていないはずがない。

トレッドマークの長い黒髪は戦場で一層目立ち、びしりと直立する姿は味方に豪勇を湧き上がらせる。

それで見ながら胸は騎士装束を張り詰めさせるほど豊満で、戦うたびにぶるんと震えて男の股間を魅了する。実はその右胸にはホクロがあるのだが、それをベッドの上で確かめられた男はまだいない。

腰回りはびっくりするほど細く、抱きしめたら折れてしまいそうなほどだ。風になびくスカートは彼女の脚線美と臀部の膨らみを際立たせ、その尻が安産型であることを知らせている。

百戦錬磨の実力とヴィーナスのような美しさ。矛盾する二つの要素を内包したケイナにはファンも多く、兵はもろろん貴族にすら狙っている者がいると噂されている。

女性としても将としても、彼女は非常に目立つのだ。敵としても放っておけるわけがない。

「今だ！ 放て！」

敵が丘の坂に差し掛かった時、ケイナは腕を振り下ろした。風切り音が耳をつんざき、矢が雨のように降り注ぐ。傍に隠れていた弓兵が一斉に矢を放つたのだ。

それらを受けて敵部隊は半壊。さらに突破された味方部隊が背後から追いつき、残存兵たちを蹂躪していく。「わざと部隊を突破させ、隊長自ら囮

となり有利な場所に誘い込む。見事に成功しましたね」

部下の言葉にケイナは静かに頷く。しかしその心中では現状の推移に反して嫌な予感が渦巻いていた。

「何かがおかしい。敵はなぜ傭兵部隊だけで行動させていた？ 本気で突撃を敢行するなら騎士隊も投入すべきだ。もし本体への攻撃が本命ではないとしたら一体何が」

「初戦果だ！ やったよ姉さん！」

歓喜の声にケイナははっと顔を上げた。丘の戦局は決し、逃げ延びた敵兵を味方が追っている状態だ。その中には今日初陣となったケイナの弟、ピーンの姿もあった。

「っ！ ダメだ！ 戻れピーン！」

叫ぶものの、その声は鎧と馬の音にかき消された。そうでなくても初めての実戦と勝利に興奮したピーンたちが止まればかわからない。ケイナは己の思慮不足を恥じた。どんな人間でも血と闘争に酔わせてしまうのが戦場だというのに。

彼らが傭兵たちを追い、やや窪んだ地形に差し掛かった次の瞬間、矢の雨が降り注いだ。

（やられた！）

自分が行った作戦の裏返しだ。囮の兵隊をわざと敵に撃退させ、浮足立った敵を包囲殲滅する。しかも傭兵を利用することで自軍の消耗を抑えている。それに対してこちらは騎士を含めた正規軍を失った。この差は大きい。

「み、味方ごと撃つなんて」

「ベントスだ。奴ならそれくらいする」
眩く部下にケイナは苦々しく吐き捨てた。

その言葉を聞いていたわけではないだろうが、マントを着込んだ騎士がケイナの視界へと現れた。奴こそベントス。ファガス公国の騎士団長の一人であり、ケイナとも何度もやり合った宿敵だ。

彼はケイナに気づくと、同じ策で来るとは思わなかったと言うように大仰に腕を広げてみせた。

「た、隊長。彼らを救出に」

「……ダメだ。既に敵に包囲されている。今から兵を向かわせても死体が増えるだけだ」

ケイナがそう判断すると敵も理解しているのだろう。ベントスの部隊は悠々とした動きで死体と捕虜を分けている。その捕虜の側にピーンがいたことにケイナは胸を撫で下ろす。

（だがどうする……このままではピーンや部下たちが敵の捕虜になる。今の戦力では助けだすことはできない。ならば私は——）

自分が代わりに捕虜となる

↓シーン2 P.078へ

捕虜となったピーンを助けると誓う

↓シーン3 P.084へ

【シーン2…血の征服】

石畳の冷たさはブーツ越しにも届いていた。寒く暗く不衛生。監禁場所として最低の部類だろう。すなわちファガス公国の捕虜の扱いは劣悪極まるということだ。

「身代金が払われるまでここで大人しくしているんだな」

看守の一人が背中を押す。檻が閉じられ、ケイナは貧相なベッドの上で目を閉じた。

（ビーンの身代わりになったことに後悔はない。だが気がかりなのは家族たちだ。元気でいてくれるだろうか）

ケイナは、家族はもちろん生活に苦しむ貧民の人々にも援助していた。そのおかげで騎士となった後もほとんど貯金はないが、それだけ大きな恩を両親と街の人々からは貰ったと思っている。それが滞り、彼らは無事に生活できているか不安が募る。

「おら、さつさと出てこい！」

ふと耳に怒声が聞こえる。見ればさつきの看守たちが奥の檻から捕虜を連れ出していった。

「お、お願いです……助けてください助けてください……」

か細い声で慈悲を求めるのはやせ衰えた老人だ。枯れ木のような腕を縛られ引つ張られている。

他の者たちも老いていたり怪我をしていたりと、五体満足とは言えない状態だ。

「おい、その者たちをどうするんだ」

「あ？ 処分するんだよ」

当然のように看守は答えた。

「老人怪我人病人ども。労働力にもなりやしねえから檻に放り込んでおいたんだよ。これ以上生かしておいても金の無駄でついで、上から処刑の命令が出たのさ。身代金を払う奴もいなかったしな。あーあ、面倒臭い仕事を押し付けられたぜ」

ぼやきながら看守たちは歩き出す。その後を捕虜たちは全てを諦めたようにただ無言でついていく。

その姿が貧民街の人々と重なった。

「ま、待て！」

格子の間から手を伸ばし、ケイナは看守たちを引き留めた。

「わ、私が代わりに稼ぐ！」

「あ？」

「その人たちの生活費を私が稼ぐ！だから処刑を見送ってくれ！」

「こいつらの生活費を稼ぐだあ？ おいおい何人いると思ってる？ そんじよそこらの仕事じゃ腹の足しにもなんねえぜ！」

その言葉に看守たちは顔を見合わせ、にやりと笑い合った。

「まあ——お前の身体で商売をするつて言うんならなんとかなるかもな」

「……なっ!?」

突然の提案にケイナは目を剥く。

「そのいやらしい身体で男に奉仕すりゃ、こいつらの飯代くらいは稼げる

ぜ？ パコパコ腰振って、男を悦ばせてみせろよ。騎士様よ」

にやにやと笑い合う看守たち。その視線が蛇のように身体を這い回り、ケイナは思わず胸を腕で隠した。

だが悲壮にこちらを見てくる老人たちを見捨てることなどケイナにはできなかった。

◆

ケイナは牢屋から出され、娼館へと移された。そして娼婦としての教育を叩き込まれ個室へと押し込まれた。

（こんな服まで着せて……）

ケイナの服装は凛とした騎士装束からはかけ離れた物になっていた。

上は乳房を周回するように作られた紐状のブラ。肌を隠すという下着本来の役割ではなく、乳房の大きさを強調するという機能に特化した一品だ。

下はレース生地を使ったショーツだ。上に比べて生地面積こそ増えているが、よくよく見れば女性器部分の素材もレースとなっており、ふとした拍子にヴァギナが露出してしまふ。

痴女。淫売。変態。

女を罵倒するそれらの言葉がびたりと当てはまる姿だ。それを見ていると本当に淫売になってしまったように思えてしまふ。

（違ふ。これは捕虜たちのための仕事だ。私は売女などではない。心まで……）

：ファガスに売ってはいないんだ）

そう自分を奮い立たせ、ケイナは部屋の中を見渡した。脱出不可能な分厚

い壁と扉。そして大きなベッドとソファ。まさしく「する」ための部屋だった。

ここはファガス公国にある娼館の一つだ。聞いた話では公国では軍人の性欲発散が奨励されており、功績を上げた者には娼館が無料で利用できるという報酬制度まであるらしい。

その中でもここは特殊な場所だ。隷属娼婦、いわゆる捕虜となった敵国の女を集めて兵士の相手をさせている。血気盛んな軍人にとって敵国の女を屈服させられるというのは非常に魅力的なようで、美人捕虜が入れば兵が押しかけてくるとか。

その時、扉のベルが鳴った。客がついた知らせだ。

「つ、来たか……」

ケイナは扉の前に跪き、相手が入ってくるのを待つ。これが隷属娼婦のマナーだと教えられていた。

扉が開いた。ケイナはゆつくりと顔を上げて客の表情を窺い見る。

「な——ベントス!?!」

今は騎士の鎧ではなくラフな普段着であるが、無精ヒゲを生やしたその細面を見聞できるはずがない。

「どうした。娼婦は客を前にしたらどうするんだったか？」

嘲弄の瞳で見下され、ケイナはぐつと奥歯を噛む。

「ほ、本日はメンサ王国の娼婦騎士ケイナ・ディエーナをご指名いただきありがとうございます」

教え込まされた口上を述べ、再び頭を下げる。

「こんな形でお前を這いつくばらせる日が来ようとはな。今日はメンサの豚どもを山ほど殺してきて疲れているのだ。さあ、そのいやらしい身体で俺の疲れを慰安して貰おうか」

「っ！」

目の前に剣が置かれた。その刀身は赤黒い血で汚れており、生々しい戦いの跡を残している。

（落ち着け……こんな挑発に乗るな。ピーンがすぐに戦場に出ることはないはずだ。だからこれは別の者の血だ）

心の中で何度もそうくり返し、ケイナは平静を保つ。

これはただの仕事。そう割り切り心も身体も全て鎮めようと決める。

「それとケイナ。その姿勢はいただけんなあ」

「ぶぐっ!？」

硬い物が後頭部を叩き、ケイナは床へと顔を押し付けられた。微妙な凹凸と土の感触から、これが靴の底であると理解する。

（ふ、踏まれている……ファガスの兵に騎士の頭が!）

嫌悪感にぶるぶると肩が震える。ケイナが誇ってきた騎士としての矜持が文字通り踏みにじられている。

「床に額も擦り付けない娼婦がどこにいる。それに、さっきの口上もいかな。こう言い直せ」

足を頭に寄せたまま腰を屈めたベン

タスが耳元で囁いてきた。それはケイナにとつて己の死よりも屈辱的な言葉だった。

「ふ、ふざけるな! そんなこと、騎士の口から言えるわけが……ぐっ!？」

踏みつけが強くなる。成人男性の全体重が首にかかり、頸椎がミシミシと音を立てた。

「お前はもう騎士ではない。金のために身体を売る雌娼婦だ。それを忘れるなケイナ!」

「ぎ、ぐっ! い、嫌だ! メンサの騎士の誇りにかけてそんなことは!」

「……逆らえばあの者たちは皆殺しだよもや忘れてはいないな?」

さらに追い打ちをかけられ、ケイナは完全に逃げ場を塞がれた。

「言え」

有無を言わさぬ強い口調。もし断れば彼は宣言通りに捕虜を殺すだろう。

「……い、偉大なるファガス公国に刃向かう愚かなメンサ王国の、ぶ、豚どもを殺していただきありがとうございます。ゴ、ゴミクズを掃除してお疲れでしょう。どうぞこの雌騎士のい、淫乱ボディを使い日々の疲れを心行くまで吐き出してくださいませ……」

悔しさに気が狂いそうだった。それでも捕虜を助けるためにケイナは言葉

を続ける。

「手、口、お尻、おマンコ。お好きな穴をお使いください。私は生きる価値もない糞以下のメンサ捕虜のために身を捧げた肉穴娼婦です。ペントス様に

押し倒され、尊きザーメン汁に染め上げられることを至上の喜びとする変態騎士です」

「ふはは! そこまで言うのなら仕方がない。お前を使つてやる。俺を満足させることができたならば、あの捕虜たちの寿命もわずかに延びるぞ?」

「あ、ありがとうございます、ペントス様」

ケイナから足をどけたペントスは挑発するようにソファアに腰を下ろし、足を開く。

「まずは口だ。戦場で勇猛に指示を飛ばしていた唇で楽しんでみせろ」

その姿はまるで獲物を捕食する蛇の口だ。だが止めるわけにもいかない。一度息を整え、ケイナは彼の股間へと身体を寄せる。

「失礼いたします」

股間に手を伸ばしベルトを緩める。既に手の平には硬い感触が当たっていた。ズボンのボタンを外し、下着ごとずり下ろせば半剥けの肉棒が姿を現した。

「うっ!」

むつと青臭いニオイが鼻をつき、ケイナは思わず顔を引いてしまった。

「そういえば、戦場から直接ここに来たのだったな。だいぶ蒸れてしまったのか。お前の口で綺麗にしてくれ」

「く、口で……?」

呆然とケイナは目の前の生殖器を見つめてしまった。ドクドクと脈打ちながら赤黒の先端が膨らんでいく。カリ

首には白いカスがまばらに張り付いている。その一つ一つがペントスの身体から生み出された精液の垢、チンカスなのだ。

「まさか、できないとは言わない? ちゃんと奉仕前の挨拶もするのだぞ」

「にやにやと口元を緩めながら、ペントスは股間を右に左に振る。その態度にこのペニスの汚れ具合がわざとであるとケイナは理解する。

「……どうかケイナのお口でペントス様のモノを」

「チンポだ。それとお口などという言葉を娼婦が言うのか? 敗北口マンコだろうが」

「……どうかケイナの敗北口マンコでペントス様のチンポを綺麗にする名譽をお与えください」

「綺麗にする、ではない。パキユームチンカス掃除だ。まったく頭の悪い娼婦だな。チンポが萎えてしまうぞ」

言いながらペントスはパキパキに怒張した肉棒でケイナの頬を叩いた。

「声も小さいぞ。君主の前で誓いを立てるように大声で宣言しろ。もし躊躇が見えたら捕虜は皆殺しだ」

「っ……!! ど、どうかケイナの敗北口マンコでペントス様のチンポをパキユームチンカス掃除する名譽をお与えください!」

ほとんどヤケクソにケイナは叫ぶ。顔は恥辱と怒りで真っ赤になり、思わずペントスを睨んでしまった。

「はははっ! いいだろう。チンカス

首には白いカスがまばらに張り付いている。その一つ一つがペントスの身体から生み出された精液の垢、チンカスなのだ。

掃除を許すぞ淫乱娼婦！」

大笑いするペンタスの顔が憎らしい。ケイナは肉棒の根元を掴むと先端に顔を寄せた。青臭いニオイはさらに強くなり、頭がくらくらししてしまふ。

「んう、べちゅっ……んんっ！」

軽く舌先で湧き出す汁を舐め取れば濃厚な汗と垢のニオイが頭を溶かす。急激に高まる体温。血液が首から顔にこみ上げてくる。

「ぐくっ……れ、れろお」

覚悟を決めてケイナはチンカスへと舌を這わせた。瞬間、雷に打たれたような衝撃が全身を駆け巡った。

「は、はうああ……こ、これえ……」

強烈無比な雄のニオイ。今までの人生で味わったことのない濃厚な味に全身が震え立つ。

（く、臭い……汚い……こんなものを口に入れるなんて……で、でも）

舌を止めるわけにはいかない。

ケイナは全身をくねらせ、カリ首を丹念に舐め上げる。舌に絡みついた塊を口内に運び、口端についた欠片を指で取って舐めた。

「はははっ！ あのケイナが俺のチンポを舐めている！ 男根の汚らしいカスをペロペロと！ どうした？ そんなに俺のチンポとカスは美味いか？」

「ふあ、ふあい……じゅぶ……美味ひいです……」

「そうかそうか！ どうやらメンサ王国の食事情はあまりにも粗末なようだな。答えろケイナ。メンサの料理と

俺のチンカス、どちらが美味しい？」

ケイナは肩を震わせ、ペンタスを見上げる。にやにやと笑う髭面に、この肉棒を噛み千切つてやるうかとさえ思つた。

「……チ、チンカスです。ペンタス様のおチンポカスの方が、メンサの宮廷料理よりも遥かに……美味しいです」

「そうかそうか。お前らメンサの者どもはチンポのカス以下のゴミを喰らつていたのか。だからあれほど臭くて野蠻なのだな。哀れな者たちだ」

「ふぶっ!!」

武骨な手が髪を掴み、ぐいと股間に押し付けてきた。否応なく肉棒が口につけられ、その龟头を口の中に侵入させてしまふ。

「それに比べてお前は幸運だな。俺のチンポをしゃぶり、俺の老廃物を味わうことができるのだ。これでメンサの臭い飯のことも忘れられよう。さあ遠慮するな。腹いっぱい味わえ！」

「んんぶううっ！」

硬い肉の感触が舌を押しつけ口蓋へと届いた。口の中は全部チンポで埋められ、脈動するたび頭全体が上下に震えてしまふ。

「ぐう……んっ、ちゅ、じゅるっ、ぬちゅっ、ぴちゅっ、ちゅぶうっ」

泡立つ唾液の音を響かせながら、ケイナは頬を窄めて肉棒に吸い付いた。舌先で感じていた硬さが口全部へと広がった。その太さ、形、弾力に至るまで全てが記憶に刻まれる。

「そのまま激しくしゃぶれ」

「ふぐっ、は、はい……じゅぶっ、じゅるるぞぞぞぞっ！」

凄まじいバキューム音を鳴らしながらケイナの顔が前後する。唇は伸び、頬は窄まったバキューム顔だ。男がその顔を見れば百年の恋も冷めるといふ物だろう。一方のペンタスはあまりに惨めな美女フェラ顔にさらにチンポを張り詰めさせ、尿道に精液を駆け登らせている。

「出すぞ！ 喉奥で受け止めろ！」

「んんんんぶううううううっ！」

びゅぐっ！ どびゅ！ びゅぶっ！

喉奥をノックする熱い噴出。それが口の中いっぱいになり、今までの比ではない男臭さが鼻孔を駆け抜ける。鼻から息を噴き出しながらケイナは全力で肉棒をしゃぶった。舌を龟头に絡め尿道に残った汁まで舐り出す。

「じゅるる……ちゅぼっ！」

口から離され、反動で跳ね上がる肉棒。その肉身はぬらぬらと輝き、チンカスの一欠片も残っていないかった。

「口を開けろ」

ちゅぶっ。

開いた口内では白濁液が池を作っていた。その中で赤い舌が踊る。口端には縮れ毛がつき、卑猥なアクセントとなっていた。

「飲み込め」

「う、ぐ……ごきゅ……くん」

ぶはあと吐息を漏らし、再びケイナは口を開けた。あれほどあつたザー汁

は綺麗に飲み込まれている。

「どうだ？ 精液のフルコースだ。美味かったか？ その精液はお前の胃に吸収され、お前の血肉となるのだ。そうだ。これからお前の食事はザーメンにしてやろう。お前の肌、肉、血は俺の精液で作られるのだ。そうすればお前の身体に染みついた臭いメンサのニオイも多少は取れるだろう」

「うぶっ！」

おぞましい話に吐き気がこみ上げる。王国の一部として誇りにしていたこの身体がファガスのモノによって作り替えられていく。

（あ、悪夢だ……）

口に残る精液の味が、喉に絡むザーメンの粘つきが、ケイナを追い詰める。「どうした？ 嬉しくないのか？」

「う、嬉しい……嬉しいです」

「ならば笑え。笑って答えろ。俺のチンポは最高だったろう？」

「はい、ペンタス様のチンポは最高です。汁も濃くてすごい量です。メ、メンサの男たちとは比べ物にならないくらい遅くして素敵でした。チンカスザーメンジュース、ご馳走様でした♥」

こみ上げる吐き気を抑えながら、ケイナは笑顔でおべっかを言い切った。その口端が引き攣っていることを本人だけが気づいていない。

「いい返事だ！ よし、上の口の次は下の口を使ってやろう！」

ベッドに上がり、まんぐり返しの姿

グリヴァーリ
魔法学園

栄えある歴史を誇る
王国随一の魔術の名門校

魔法生徒会長に
気高き卑劣な選択が突きつけられる…

最先端の魔術を
学べる環境を有し

かつては
高名な魔術師を
数多く輩出してきた

この計画は
どういふことですか!!

学園長室

学園長!!

少女が媚女に
随チル時



ふむ…
ではそうですね

君が一人で皆の分まで
体売って金を稼ぐ
というのはどうでしょう？

…えっ

皆で負担する分を
君一人で負うのです
その負担は非常に
大きくなるでしょう

嫌と言うのであれば
他の女子生徒達に協力して
もらうことになるのですが
いかがでしょう？

もみ

もみ

やめ

だが鈴科天音君
君なら生徒会長として
顔も売られています

高額で君を買いたい
という客も
出てくるでしょう

分かり…ました

私が…
やります…

ははっ
それでは明日から
頼みますよ鈴科君

んっ…

ムニイ

ほう
よく似合ってますね

——っ
何を…

それぐらい自分で
考えたらどうですか？

お客様に気に入られて
少しでも高額報酬が
欲しいのでしょうか？

くっ…

キッ
下衆な…

ですが…
そうですね…

これからお客様の
前に出るのです
そんな不安そうな顔で
どうしますか

ですが…私
こういうの初めてで…
どうすればいいのか…

少し私の方から
プレゼントです

ホワッ

？

痛み止めの
ようなものです
初めては
大変でしょうからね

さあお客様が
お待ちですよ

かきや

おう待ってたぞ

そその…今日は
お買い上げいただき
ありがとうございます
鈴科天音といいます

いっぱい気持ちよくなって
頂けるよう頑張りますので
よろしく願います

あーダメダメ
そんなんじゃ
ダメだよ天音ちゃん

え？

ドキ

ドキ

そんなっ

それじゃあ
俺の言うとおりに
やってみる

それじゃ全然興奮しない
って言ってるの
これじゃ当初の報酬を
払うのは…

そんな…
でもどうすれば…

コソ

いいえ
分かりました…

これも
学園のため…

コソ

カアアア

んー？

今日は
私の処女を買って頂き
ありがとうございます

ふる

お客様のぷっといチンポで
私の処女マンコをいっぱい
かわいがってください

ふる

ほあ

そうそう
ちゃんと笑顔で
誘わないとなあ

ふるんっ

それじゃ
そろそろ…

ああんなのが…
私の中に…

ひうっ

セクッ

そろいぐぞー

あっ…

やっ…
うそ…

しんぷ



「今日も沢山身体を売って稼ぐのよ……」
娼婦に身を落とした魔法少女の目的とは？

小説 くろな 黒名ユウ
挿絵 な かん奈
ILLUSTRATION

魔法少女娼婦化計画

～そして少女たちは悦獄に堕ちる～

「ヒビ、へへヒ……チョロイぜ……」

狭い路地裏で一人、学生服の少年が上ずった声で呟いていた。チョロイという言葉のわりに、緊張の残る強張ったニキビ面。色気づいた感じに垂らした前髪を払うように、ほんのりと浮かんだ額の冷や汗をぬぐい、ポケットから取り出したのはポテトスティックのスナックカップ。すぐ隣のコンビニからくすねてきた本日の戦利品だった。

「グフッ、グフフ……店員のババアちつとも気づかぬーでやんの。間抜けすぎ。これだからやめらんねえ……」
醜い笑みで顔を歪ませ見惚れる。

別に腹が減っていたわけではない。物を盗むと世の中に影響を与えられた気がしてアソコが勃つほど快感なのだ。

だから、家まで待てない。万引きした品物をすぐにでも眺めたくなる。

しかし、至福の時間は背後から掛けられた冷やかな声によって破られた。

「……それ、どうしたの？」

ニヤつかせていた顔が凍りつく。振り返ると、すぐ後ろに声の主——怒りを込めた大きな瞳で、真っ直ぐに彼を睨みつける美少女が立ち塞がっていた。

「……ミサキ……！」

「家谷、あんたのお金払ってないわよね」

ミサキと呼ばれた少女は、ややクセがついていてボーイッシュな雰囲気もなくはないセミロングの栗色の髪を肩越しに片手で払うと、恐れ気もなく更に一歩前に進み出た。体格が良いわけではない。万引き少年、家谷よりは頭

ひとつ低い背丈。細い手足、丸みを帯びた普通の女の子の体つき。

それでも、家谷が気圧され、後ずさりしてしまつたのは、その満身から立ち上る正義感の迫力のせいだった。ミサキは、少し離れて心配そうにしている連れの女友達二人——クラスでも鼻つまみ者の彼と関わるのを恐れているようだ——を隠すかのように、両手を腰に当て、背筋を伸ばした姿勢をとっていた。そして、怯むことなくハキハキとした口調で説教をする。

「ひとつ万引きされるだけでどれだけお店に損害が出るか知ってるの？」
「なっ、なに決めてつけてやが……」
「この目で見てたの！ つべこべ言わずに、おばさんに返してきなさいよ！」

実は目撃したのは彼女自身ではなく、後ろにいる友達の夏奈と樹里だったのだが、敢えて代わりに自分が見たと言

う。ミサキはそんな性格をしていた。
「ううっ……うっ……」

家谷がたじろいだそのとき——彼の手中でスナックカップが震えた。

「ウ……ウルセエエエエエッ！」

ぼうんつと勢いよく膨れ上がるお菓子の容器。カップの腹には暴帝めいた充血する眼孔と巨大な口が裂け、無数に並んだ鋭いポテトスティックの牙と真つ赤な舌を躍らせて大きく咆哮する。

「まっ……魔物?!」
息を呑み、目を見張るその場の一同。

魔が宿りし「物」——魔物。交通事故よりは少ないが、話には聞いたこと

があるその遭遇。TVや新聞では見るが、誰もまさか自分とは思わない。

「うわわわわ……」

一番狼狽えているのは家谷だ。魔物の化は彼の意図によるものではない。彼の悪い心が勝手にカップに乗り移ってしまったものなのだ。みつともなくビビッて放り投げられた魔物はミサキの頭上を越えて後ろの二人の前へ。

「きやあああああ……！」

「ウッセーンダヨッ！ 糞女共ッ！ イツモイツモ蔑ム目ヲシヤガッテ！」

少女たちの悲鳴とゾツとするような魔物の叫び声が重なった。

「夏奈ちゃん、樹理ちゃんっ！」
突然の事態と、魔物の恐ろしさに硬直していたのは一瞬のこと、友人の危機に我に返ったミサキが、躊躇なく魔物の前に身を投げ出し二人を庇う。

「ケッ！ ま、魔物なんて売りやがって、糞コンビが！ 俺は悪くねえ！」

責任転嫁した上に、これ幸いと路地の向こうへと逃げ出すクズ野郎。だが、それを追っている場合ではない。

「テメラノ骨をバキバキニシテ……」

ポリポリ食ツテヤルゼエエエッ！」

ヨダレをまき散らして凶口が迫る。
「いっ……嫌あああ……」
なす術なくうずくまる友人を、己もまた同様に無力でありながら、ミサキは精一杯抱き締める。そのとき——

「退け、悪しき心よ！ 罪なき物を癒しの力で慰め、魔の法にて縛らん！ キュアー・ストライク！」

不思議な閃光が路地一杯に広がり、次の瞬間、後方へと吹き飛ぶ魔物。

代わりにミサキの前に立っていたのは、花の形のエンブレムとリボンのふわりとしたコスチュームに身を包んだ美少女だった。

その背を覆う長くて艶やかな黒髪。超常のオーラを立ち昇らせたしなやかな身体に、豊かに張り出したバストとヒップ。少女というにはやや大人びた印象を与えるのは、どこか寂しげな厳しい顔つきのせい。それでも彼女は「少女」と呼ばれるべき存在だった。

「ま……魔法少女？ 本物……!」
驚くミサキ。魔法少女。それは魔物を退治し、ときには災害などから人々を救う謎の存在。ニュースになることはあっても、彼女たちがどこから来てどこへ去っていくのかは誰も知らない。

だが、ミサキのその反応に魔法少女の方もまた驚きを感じたらしかった。

「あなた……気を失わないの？」
「えっ?! あっ……夏奈、樹里っ！」

二人の友人が傍らでドサリと地面に倒れるのを見てミサキが恐怖する。

しかし、黒髪の少女は平静だった。

「大丈夫……魔法の力にあてられて、失神しただけ。意識を保っていられるなんて、あなた魔法の才能があるのね」

「えっ?! 私に……魔法の……?」
「話は後つ、まだ魔を払っていない……」

「コノ糞ビッチガアア……」
怒りで元の大きさの何倍ものサイズとなつたカップの再襲来！ ぼうつと

していたミサキを守ろうとした魔法少女が、モロに体当たりを食らい、空高く吹き飛んだ。路地を囲むビルの壁に叩きつけられて小さな悲鳴を上げる。そこへ、とどめとばかりに魔物が突進する。だが、今度は彼女の方も迎撃態勢を整えていた。

「断末の魔法、キュアー・ストーム！」
五芒星状に展開された輝く魔法陣が肥大化した魔の体に絡みつく蔦となつて縛り上げ、巨大な花弁が魔物の苦痛の慟哭を呑み込み……そして。

あつげにとられて見上げていたミサキの足元に、元通りに戻ったスナックカップがポトリと落下した。

「凄……これが、魔法の力……」

「もう大丈夫よ……ううっ！」

その傍にフワリと着地した魔法少女が呻いてふらつき、壁に手をつけて身体を支える。その瞬間、色鮮やかだったコスチュームがノイズの入った映像のようにボヤけて彼女の変身が解け、その姿にミサキは再び驚きの声を上げた——今度は、彼女のその正体にも。

「あなたは！ マリヤさん……!!」

ひとつ上の学年の、学園の誰もが知る才女。成績ばかりでなくその大人びた美貌と、聖女のような優しさで誰からも慕われている憧れの人。無論のこと、ミサキも尊敬している。その彼女が、魔法少女だったなんて！

「大丈夫ですか、マリヤさん。どこか怪我を!? あつ、血が……!!」

「ううん。平気よ……これくらい……」

そう言つて口の中で何か唱えて傷口に手を当てるマリヤ。柔らかな白い光が優しく照らすと、その肌の裂傷が薄くなり消失する。

「それ……魔法ですか?」

「ええ。魔法は癒しの力でもあるの」

「凄……あつ」

「どうしたの?」

「すいません！ お礼を言うの、忘れてました！ 助けてくださつてありがとうございます」

「ふふ、面白い子ね、あなた。でも、いいのよ、魔物を退治するのは私たち魔法少女の役目なのだから」

そう言つて優しく微笑むマリヤは、学園でいつも目にする優しい先輩そのまま……そのせいだろうか、ミサキはつい、口走つていた。

「あのつ、私でも魔法少女になれますか?! さつき才能があるつて……マリヤさんと一緒に人を助けたいです!」

「そんなことは考えないで!」

ピシャリと返された厳しい口調と、思いもかけぬ怖い顔に、ハッと息を呑むミサキ。そこへマリヤが重ねて言う。

「魔法少女は、あなたが考えているより過酷なものよ——」

「そんな、私そういうつもりじゃ……」

「聞いて。あなたの気持ちは嬉しい。軽い気持ちでないということも信じて。それでも……なりたくないなんて言わないで。私は魔法少女が必要ない世の中に

するために戦っているのだから」

論すように言つて年長の少女は表情

を改める。いつもの思いやり深く優しい、しかし、どこか憂いを秘めた顔に。

「それじゃ、私の正体は黙っていてね」

立ち去るその背中を見送つたミサキは、傍らで眠る夏奈と樹里に目をやり……彼女たちの落ち着いた呼吸を確認すると、そつと、その場を離れた——マリヤの後を追つて。

「それでも私、魔法少女になりたい! 過酷だという戦いをするマリヤさんの力になりたい。みんなを助けたい!」

※ ※ ※

「こんなの嘘……信じられない!」
絡み合う肌色の物体。ミサキはそれが何であるかすぐには理解できず、目の前の光景に愕然として立ち尽くした。

大きな一面のガラス張りの壁。そしてその向こうの部屋の中のピンク色のベッドの上では、全裸のマリヤが四つん這いとなって、腹のたるんだ素っ裸の中年男性の尻を舐めさせられていた。

ピチャ……ペチョ……れれろっ!!

仰向けとなつて寝転ぶ男の、臀部のたるんだ肉の割れ目にその美貌を埋める憧れの先輩。それだけではない。学園一の美少女は男を跨ぎ、その眼前に

自らの秘所を晒しているばかりか、更にもう一人、傍に膝立ちする若い男に、

電動の何やらヴィイインという怪しげな振動音を発する器具を押し当てられ、苦し気な呻きを漏らしていた。

「う、ううっ……んあ、はあっ……」

眉を蹙め、せつない顔つきになりながらも、醜い排泄口に舌を這わせる。

「ええど、ええど! グヒッ……マリヤちゃんの舌使い、この頃随分上手うなつてきたんとちゃうか? そうや、丁寧にシワの一筋まで唾液がいきわたるようになるんやで! おうふうっ」
感に堪えないといった上ずつた声。

「は、はい……ありがとうございます……これからもどうぞマリヤをご指名……あううっ! くっ、くださいませ」

返事の最中に振動器具を秘所深くへと潜らせ、思わず顔を跳ね上げる。

(嘘よ! こんにちは……こんにちは!)

マリヤさんであるはずがない!)

ミサキはようやく我に返つた。

あれからマリヤを追つて辿り着いた古びた洋館。大きな門の中へと姿を消した彼女に続いて中に入った。迷路のような薄暗い館の中を一人彷徨つて、

出くわしたのがこの光景だった。

「へへっ……こつちの態度も上々だぜ。ピシヨピシヨにしやがって。淫乱が!」

「ああんはあつ……は、はい……マリヤは淫乱です。電マ当てられながら殿方のアナルを舌でほじるのが大好きな……う、ううっ……ドスケベ魔法少女です……んくううっ……んはあつ」

後ろの男に責められながら、学園での彼女を知る者にはとても想像もつかないような淫らな言葉を口にしているかのような哀切を感じさせた。

「やめなさいっ! 先輩にそんなこ

と！ 今すぐやめないと……！」

拳を固めてガラス壁をドンドン！と何度も叩くミサキ。しかし、壁面はビクともしないばかりか、向こう側の誰にも物音が伝わっていないようだ。

「ゲヒヒッ……おつ、おおう、そうや！舌を……もつと、奥まで入れてや！

マリヤちゃんが心を込めてお掃除してくれるから、おつちゃん毎日よーさんウンコ出せるんやで……フヒヒッ！」

「マリヤちゃんのお通じはどうだい？ キュッと締まってピンク色した、この可愛いらしい穴じゃあ、ウンチしてる所なんて、とても想像できないよ！」

高く持ち上げられたマリヤの尻に、指を入れてほじりつつ若い男が顔を近づけチョプチュバと下品な音を立てて吸引する。すると彼女は大きな卵のよう

な白い肉を震わせて身悶えするのだ。「あああつ、ああんつ！ そんなっ！ いやらしいこと……言っちゃ、嫌あ」

「先輩、せんばいっ！ マリヤさん！」 ガラス面に鼻をつけ、声も枯れよと叫ぶミサキ。しかし、届かない。

と、そこに背後から声が出た。「ゲコッ……騒ぐのはご遠慮願いたい

ゲロ、お客様……ん？ 違うゲロか」 「え……？」

振り向くとそこには一人、カエルのような顔をした……いや、カエルだ

離れた左右の巨大な眼、大きく裂けた口。紛うことなきカエルの頭部をもつ

「まっ……魔物!?」

ミサキは悲鳴を上げたいのをグツとこらえて、精一杯の勇気で睨み返す。しかし、返ってきたのは間延びした呑気な口調の答えだった。

「違うケロ。この館のオーナーだケロ」 「……オーナー？」

言われてみれば、魔物とは「物」がベースとなった姿なのだから、この怪物とは違う気がする。しかし、一体何を言っているのか見当がつかない。

「そうケロ……ここは、正義の心を持った思春期の少女にしか見えない、魔法少女の館。そのオーナーだケロ！」

「少女って……あつ、あの人たちは！」 指さされたガラスの向こうの男たち

を眺めるカエルは平静なままだった。「あれはお客様ケロ……魔法の力は癒

しの力。でも、使えば消費してしまうケロ。だからここでお客様を、自分の

肉体で癒して魔力を回復するケロ！」 「どこが癒しなの！ やめさせて！」

と、再びミサキはガラスを破壊しようとする。今度は蹴りだ。だが、結果

は変わらなかった。ビクともしない。「無駄ケロ！ それは魔法のスクリー

ンだケロよ！ それに、マリヤはそんなこと望んでないケロロ！」

「嘘よ！ 先輩が……こんなこと……好きでやってるわけない！」

魔法のスクリーン——とは全然見えない。まるで本当にすぐその向こうに

人が息づいてるのかのような情景の中で、マリヤが二人の男から尻孔をぐばつと

掘げられて身体を反り返らせていた。

「うりや、うりやあ！ マリヤちゃん

のケツ穴、もうトロットロや！ マン汁も良い具合に擦り込んだるわ！ ど

やあ！ 気持ちええやろ！ 言うてみんかい！ この変態魔法少女が！」

「あぐううっ！ ゆ、許して……あああ、感じますっ！ で……でも……」

変態なんかじゃ……嫌、ああああ……」身をくねらせる美少女の羞恥に歪んだ顔。屈辱に頬を伝う熱涙。とても

望んでしていることとは思えない。「……マリヤは偉い子ケロ」

カエルがポツリと咬いた。「こんな思いをして魔法少女をやる子

をこれ以上、増やしたくないんだケロ。だから、無理してあんなプレイまで……

……そうやって魔法の力を沢山貯めて、自分一人だけで魔物と戦ってるケロ」

「そんな……！」 ——魔法少女は、あなたが考えているより過酷なものよ……。

そう言ったあの寂しげな横顔。ミサキは言葉を失った。そんな真実が隠されていたなんて思いもしなかった。

あまりのことに立ち尽くす。だが……それでも……マリヤを手伝いたい

助けたいという最初の想いは失われなかった。それが意味することがわかって

も。「私も……なれる？」

その瞳に、持ち前の正義の光が灯る。真実を知っても、たとえそれが淫ら

な地獄のようなものであったとしても、いや、だからこそ、マリヤの苦しみを

同じように味わってでも、支えたい。そして終わらせるのだ。マリヤの——否、全ての魔法少女たちの苦しみを、そう心に決めた。もう、何も怖くない。

「ほ……本気かケロ!!」 「本気よ。私……魔法少女になる！」

※ ※ ※

魔法少女に変身して魔法を使うためには癒しの力、キュアが必要ケロ」

別室に通されたミサキは、卵の殻のような形をした半球形の大きな一人掛けのソファアーチェアに腰を下ろし、緊張した顔のまま説明を受けていた。

オーナーの手に握られているのは、先ほど渡したミサキのスマホだ。

「キュアは客が感じた快感に応じて自動で支払われる電子魔法通貨でもあるケロ。それを受け取るためのアプリ

をこれからインストールするケロン」物には心が宿る。個人と強く結びつく

スマホに魔法のアプリを入れることで、ミサキを魔法少女——男を悦ばせる

対価として魔力を得る『魔法娼婦』へと生まれ変わらせるのだという。

より多くの淫らな行為をすればそれだけ沢山のキュアが貯まり、強力な

正義の発動が可能になる。また、小出しな何回も魔法が使えるというわけだ。

(そして、一人で戦う決意のために……)

……マリヤさんはあんなことを)

望まぬ奉仕にその身を犠牲として、それでも挫けず、人々を救うために魔

世界を手中に
収めんとする
覇道の魔王

魔界の軍勢に
立ち向かう
一団があった

彼らは
各地で戦い
絶望に沈んだ
民衆に希望を

勇気を与えて
いった

7

だが！
勇者の旅にも
先立つモノは
必要でして…

いーの
いーの
息抜きも
必要だよ

オリビアは
堅いな

それに！
あの剣を
ゲットすれば
今後の旅が
楽になる！

10,000
5,000

あのー

Casino Hotel Me!

こういうのは
あまりよくない
のでは…？

地道に仕事して
稼ぎませんか？

は…

はあ…

エロさ倍プッシュでお届け！

プリンセス オリビア

～娼婦に堕ちた聖女～



困ります
なァ

負けた分は
きっちり払って
頂きませんと

ウチは
明朗会計の
カジノです
からなァ

払えないと
言うなら

その肉体で
稼いでもらい
ますぞォ



いらっ
しゃいませ

お客様

オリビアと
申します…

おお神よ
これは何の
試験ですか

ひどい
ですう

なあに
体売る
ワケじゃねえ

お前のせい
だよね!!

ちよつと
客に幸せな気分にな
ってもらう

まさか
あの後
親がピンゾロ
出すとは…

お告げは
正しかった

せ精二杯
おもてなし
しますので

楽しんで
ください
ませ…

へえ
こんな可愛い
子が相手して
くれるとはね

奉仕活動
ってヤツさ

じゃあ
早速♪

7

なにな？
何ですか
不潔な！

あれ？
その反応

もしかして
初めて？
借金のカタに
ってヤツ？

教えてあげる
からさ

頑張っ
てみようか

そうでした
お金のため

は…い

みんなのため
我慢しないと

まずは緊張を
ほぐそうか

抱きついて
キスして

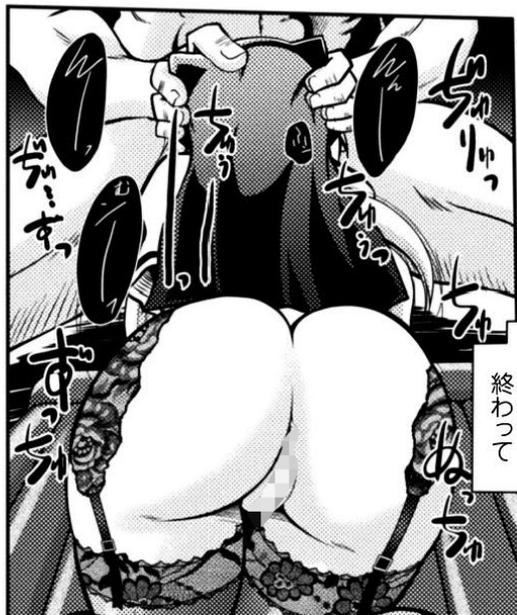
んん…
んん

こ…う
ですか？

は…あ

神様…
お許しください

これも…
魔王を倒す
旅のためです



BUBBLE GIRL!

パブルガール!

デリヘルで目覚める娼婦の心

正義の変身ヒロインが
おカネとペニスに負けて
風俗堕ち!?



き もり やま すい どう
小説 / 木森山水道
挿絵 / ミルクセーキ

某高級ホテルのスイートルーム。上品で綺麗なベッドの上で、そのふたりは下品なポーズをとっていた。従順な犬みたいに四つん這いになり、瑞々しい乙女尻を上げ、隠すべき大事な秘部を差し出すように見せつけている。彼女らの衣装の挟み込めるところには、ことごとくお札がねじこまれていた。

「この『アウトター』！ 資格なしに『能力』を使うのも、お金で女の子を買うのも最低！」

ひとりには変身ヒロイン。胸元が清楚かつ控えめに育ち、長い手足がしなやかな若い女体は、ぴっちりしたハイレグレオタードで身を包んでいる。手足には長いグローブとソックスを着け、西洋鎧の籠手や鉄靴めいた金属の華やかなパーツを装着していた。

そんな勇ましくも麗しい乙女は、気の強そうな面差し通りに正義の抗議を口にしたが、紙のように薄いコスチュームが浮き上がらせる、肉付きのいい女の舟形は、既にヌレヌレ。牝汁の太い筋で太腿を汚す下半身は、オスを挑発する風にくねっている。

「大金でわたしを買ってくれる、いやらしい巨根オチンポ……早く頂戴っ」
もうひとりには女子校生。顔と体型が隣の変身ヒロインそっくりなもの、気の強そうな尻はトロンと落ちていて、瞳に映すモノに完全に心を奪われているのだ。

なにせ、若く清楚な外見からは想像

できない扇情的なセクシーランジェリー——穿き口に沿ってバラ模様が無邪に咲き乱れているというのに、大事な部分だけは男に媚びる風に薄く透けている下着——を着けているだけでなく、変身ヒロイン以上に濡らしている。クロッチは劣情のシミで大きく楕円に黒ずんでいた。淫らな期待でパンパンに肥厚した無毛の若い肉唇の輪郭は、裸同然にクッキリと浮いている。

「ふふふ。オレ様の『能力』で、女子校生と変身ヒロインに分裂させても、スケベさは変わらないらしい……もつとよく見ろ。お前らの大事なマンコを買うこの札束を。札束と引き替えに行う和姦で女子校生変身ヒロインマンコを食い散らかし、憎むべき悪の牡エキスを忘れられなくなるほど注ぎ、ふたり纏めて何度もイカせる、このデカ巨根チンポを」

デリバリーヘルス——呼んだ女性に性的な奉仕をしてもらえるサービスマン——で彼女を買った異形の男は全裸だった。誇るだけのことはあるドス黒くて禍々しい巨根を、その竿部に寄せた分厚い札束を落とさないようにしながら、強調する風に揺らす。

「いつまで待たせるのよ、この悪党！ 同意セックスでわたしを滅茶苦茶にするんでしょ！」
「わたしを大金で買ってくれた巨根オチンチン様、早くきて！」
これから始まる物語は、女子校生変身ヒロインの彼女がカネで買われてす

る性交——娼婦セックスに目覚めてハマってしまふまでの経緯である。

1

「この『バブルガール』は、あんたたちみたいに『能力』を違法に使う『アウトター』の悪しき努力を水の泡にする正義の『ヒーロー』よ！」

昼すぎの繁華街に強気の啖呵が響く。仁王立ちして悪に立ちあはだかるのは、うら若きヒロイン。外見年齢は十代半ば。正義感の強そうな面差しをして、背丈は百五十センチほど。胸も小柄な女の子はハイレグぴっちりスーツを纏っている。手足のグローブやソックスの上には、戦うヒロインの装備らしい金属パーツを装備していた。

「最近噂の『ヒーロー』、いや変身ヒロインか。正体は女子校生らしいが……じゃじゃ馬め。目覚めた『能力』をどう使おうと個人の自由！ だから現金輸送車を襲ってもいいんだよ！」

勇猛にして可憐なヒロインに睨まれている三人組。その男のリーダー格が、凶暴に叫ぶ。姿は普通の人間と違っていた。能面めいた白い顔に、赤銅色でボディビルダー顔負けの筋骨隆々ぶりに着ける物ば、収まっている巨根を誇示するかのような、前布が縦長の黒ビキニ紐パンツだけだった。

「仲間のやられ方を見ていたが、お前の『能力』は粘着質の泡を生み出して操ることなのだろう？ 対してオレ様の『能力』は変身と振動。変身すると

破壊の波動を放てるのだ。粘つく泡で仲間のようには身動きを封じられる前に、お前を破壊してくれる！」

他のふたりの仲間が彼女の『能力』で既に拘束されているというのに、ふてぶてしい。自分が捕まるなど微塵も思っていないようだ。

「それは厄介な『能力』ね。でも対策はあるわ……『バブルシーカー』！」
頭上に両手を掲げるヒロイン。両手から大量の泡が放たれる。それはみるみる合体し、彼女を覆っていく。

「なにっ！ 姿が消えた……!?!」
ひとつの大きなシャボン玉に包まれた彼女の姿が消失。余裕ぶっていた変身犯罪者も流石に目を刺き、どこにいるのかと落ち着きなく周囲を見渡す。

「くそ！ あの大きな泡にステルス機能があつたに違いない。内部からは見えるだろうから、マジックミラーといつてもいいのだろうが、いずれにしても、忍び寄って捕まえる気だ……なら、全方向に最大威力の振動を放つまで。姿を消しているも粉微塵にし……っお！」

赤銅色の目の前に、変身ヒロインが突き出した両腕が現れた。姿を消して移動していた彼女は、視界を埋め尽くすほどの泡を噴出。変身悪人は泡塗れ地面に転んで動けない。

わあああああああああああああ！
遠巻きに見ていた人々が大歓声。変身ヒロインは愛想よく手を振る。
（ああん！ 認められてる実感が快感となつてカラダを駆ける。これだ

からヒーロー活動はやめられないわ)

自分を抱いて身もだえする。しかし、次の瞬間ハツとした。慌てて横に飛び、ドガァン!

背筋の凍る見えない猛威が、信じられない速度で今までいた場所を通り過ぎ、ずっと後ろのビルの壁を完全に破壊。どこかの会社の事務所らしいその内部が丸見えになる。

「この場は引き下がりますが、カリは返すいずれ足下に跪かせてやるからな!」憎悪の声で宣言したのは、動けないはずの赤銅色の変身犯罪者。

「一体どうやって逃げたの……?」
 答えたわけではないだろうが、彼は仲間へ順番に手をかざした。振動を放つたらしい。縛めの粘液は粉々に飛散濡れ跡もなくなった三人は、あつという間に逐電する。

「そうか。身体から振動を出して抜けたあと、強力振動をぶつけてきたのね」
 恐ろしさから追いかけるのも忘れ、ゴクリと緊張の唾を呑むヒロイン。と、
 「え?」

後ろから手首を掴まれた。妙に力を込めて握るのは見知らぬ中年だった。
 「初めまして。バブルガール。ちゃん。きみの油断で盛大に壊された私のお店は、弁償してくれるんだよねえ?」
 今後は、風通しがよくなりすぎた事務所でしょうじゃないの」

(わたしこれから……デリヘル嬢のバ

2

イトをしちやうんだ……)

部屋に入ると自動で締まったドアの音が、やけに大きく聞こえた。店長からの連絡に応じ、制服姿で放課後の学園から指定の場所に赴き、自分を指名したお客と合流。その後、お客が決め

た高級ホテルの高層階の部屋に入った。デリヘルことデリパリーヘルスで働くことになったのは、ビルの壁を壊したのが原因だ。現れた店長は「不慮の事故だから」とかなりまけてくれたものの、修理費用の一部の負担を迫った。

その額なんと百万円。ヒーロー活動をするので、国からいくら報酬をもらっているが、バブルガール。こと泡沫操の正体は、ただの女子校生。払えるわけがない。

途方に暮れたときに目にしたのが、事務所の壁に立てかけられていた求人看板。「空いた時間で勤務オーケー」。「数日で数十万も夢じゃない」、「アリアイ作りは完璧。身バレ確率は限りなくゼロ」などという、渡りに船の文章が躍っていた。壊れた事務所はデリヘル店だったのである。彼女は一も二もなく飛びついた。簡単な講習を受け、今日、初めてお客を取っている。

「こんな可愛い子と遊べるのかあ。店長に聞いたが、初仕事だって?」
 この丹本国。の最近の法改正で、女子校生もデリヘルで働けるようになったわけだけど、本当によかった」

お客は露骨にはしゃいでいた。歳は五十歳前後。早速全裸になった彼は、

脂ぎったメタボ体型だが、おらかな恵比須顔で、頭のバークード禿もなんだか可愛く見える。もつとも、強い加齢臭と握っても飛び出すサイズの黒ずんだベニスには慣れそうにないが。

「ミサオです。改めて、よろしくお願ひします」
 ベッドルームで向かい合い、ペコーとお辞儀。店長が言うには金持ちの紳士らしい。なら、大切に接してリピーターになつてもらおう。それが、借金返済の近道というもの。

「ミサオちゃん。予約していたオプシヨンは、実行してくれたかな?」
 「もちろんよ。オジサン指定のアダルトランジェリー。ご注文通り、学園でも着けっぱなしだったわ」

中年好きする気さくな態度で応じる。スカートの裾を摘まんでお腹までたくし上げた。女の羞恥を押しつけて営業スマイル。生まれて初めて男に下着姿の下半身を見せる。

「うんうん。真つ赤で色っぽい、男を楽しませるためのレース下着は、ミサオちゃんにもお似合いだ。一日穿いていた下着特有の濃い匂いが漂ってくるのも堪らない」

じっくり鑑賞する中年だったが、ほどなくおぞおぞ切り出す。
 「ショーツの底は開閉する仕組みだろ?」
 そこからチンポを通して、ショーツとオマンコに挟まれながらズリズリしたいな。変則的なスマタだね。体位はバック。わしが後ろから抱きつく

形さ。シャワーとかヘルスプレイとかの普通のことを飛ばして、すぐにしたい気分なんだ。きみがあまりにも魅力的で辛抱堪らないんだが、いいかね?」
 「わ、わかったわ。オチンチンでいっぱい気持ちよくなつてね」

店の講義で卑語を理解している女子校生は、お客の心理も学んでいる。予習済みでも実際に目にする、大人の低俗なガッツキぶりにはたじろいでしまいが、すぐにウイソク。

「おほっ! ありがとうミサオちゃん。コレはチップだ。受け取つて」
 脱ぎ散らかした衣服の財布から一万円札を数枚抜き、女子校生に握らせる。
 「え、こんなに!? これって、わたしを高く評価してくれてる証よね……?」

操の胸が高鳴った。ヒーロー活動をして皆に賞賛されるときみたいな、なんとも言えない甘い気持ちがかみ上げてる。心が明るくなり、なんでもしてあげたくなつてきた。

「オジサン! わたしのオマンコでよかつたら、いくらでも使つて」
 「ミサオちゃん最高!」
 中年は背中から抱きつく。片手を伸ばし、下着のクロッチを開けた。女子校生は抵抗しない。むしろ手伝った。間髪容れずに押しつけられた、太く長く硬化した肉棒が下着の穴を潜りやすいよう、Tバックのヒップを揺らし、股間の位置を調整。最初は慣れそうにないと思つたベニスも、今ではなんだか格好よく見え、身体に触れても悪い

好評発売中!

いざ 娼婦館への いざない

小説 ゆう あらおし悠

挿絵 イラスト はらいた



勝ち気なお嬢様が初めて触れる快感！
娼婦となっても屈さず高みを目指す！！

短い金属杖から、閃光が放たれた。衝撃と轟音が闘技場を揺らし、男子学生が吹き飛ばされる。地面に転がって悶絶する彼の姿に、審判役の教師が慌てて勝者を告げた。

「マ……マリイ・マルム！」

「あら、もうおしまいですの？」

しかし、勝つたとは思えない不満顔で、マリイは魔法の杖を肩に担いだ。王立学園主催の格闘大会。その魔法部門決勝戦は、強烈な風の衝撃波一閃で勝負がついた。圧倒的な力を見せつけたのに、会場には、表彰台に上がった少女を祝福する空気がない。

「おめでどう。さすがは宮廷魔導師の名門、マルム家の名を継ぐ者だ」

それでも、白い髭をたたえた学園長だけは、マリイの首に優勝メダルをかけながら祝福の言葉を与えた。

「ありがとうございます。でも私の優勝は自明でした。同学年の彼らでは、我が血筋に敵うはずありません」

そう学園長に応じたら、敗れた生徒たちからは怨嗟の呻きが、客席からも呆れたような溜め息が轟いた。

「……？」

マリイは相当に謙遜したつもり。なのに、なぜ誰も褒め称えてくれないのか、首を傾げずにいらなかった。

普段の学園生活でも、マリイへの風当たりは強い。女子はあまり話しかけてくれないし、男子は、マリイの実力を認めようとする者も多い。

「今度こそ、お前の生意気な鼻っ柱を折ってやる！」

今日も、先日の魔術大会での結果に不満を抱く男子学生が勝負を挑んできた。もちろんいつも通りに軽く返り討ち。こんな決闘騒ぎはマリイ的には日常茶飯事で、そのたびに、学長室に呼び出されるのだった。

「マリイ、私闘は禁止と何度も言っているだろう」

「ええ。ですから私に挑んでも無駄だと教えて差し上げているのです」

ただ、学園長は頭を抱えるだけで、お咎めを受けることはない。

当然だ。宮廷魔導師といえば王の側近中の側近。そしてマルム家は、代々その地位を独占してきた名門だ。その令嬢に手を出す方が間違っている。

これで才能が伴っていないければ、非難される理由もあるだろう。しかしあいにく、マリイの成績は学園トップ。先日の魔術大会でも、初戦から決勝まで、相手の攻撃を一発も食らっていない。そのせいで、なにか不正をしていると思われているようだ。

「みんなにも困ったものね」
学長室からの帰り、廊下の鏡に映った自分の姿に溜め息を吐く。

きめ細やかな肌に、勝気な性格を表す吊り目の青い瞳。腰まで伸びる金髪は、毎日の丁寧なブラッシングで規則正しく波打つ。すらりと伸びた長い脚のおかげで、人並みしかない身長を実際より高く見せる。

近衛服に似せた詰襟の制服を誰よりも着こなしていると自負しているし、そして、その上に纏うローブは傲慢であり、誇り。他の魔法部門の学生が茶色であるのに、マリイだけは、一流魔道士の資格を得た証である黒。

家柄と美貌、そして魔道の才。

「こんなに完璧な人間が、嫉妬されないわけないわ」

マリイは寛大な心で、みんなが僻む気持ちに理解を示した。

学長のお小言のせいで、放課後になつてしまった。午後の授業を欠席させられたのは、完璧主義者のマリイにとつて非常に不満。後で、なにかの形で補償してもらおう。

そんなことを考えながら廊下を歩いていると、マリイを見つけた数人の女子が、ヒソヒソと内緒話を始めた。どうせ悪口だろうと気にも留めず、脇を通りすぎようとする。

しかし、漏れ聞こえた内容は、決して看過できないものだった。

「お父さまあああつ!!」

全力疾走で屋敷に戻ったマリイは、令嬢らしからぬ大音声で父親の研究室に怒鳴り込んだ。

「な、なんだ。なにごとだ!?!」

いかにも学者然とした丸眼鏡の父親は、娘の怒号に怯えたように振り返った。とても高官とは思えない気弱さには常日頃から呆れているけれど、今日は、そんなものでは済まされない。

「私、学園でお父さまのよからぬ噂を聞きました。莫大な借金があるって本当ですの!!」

「ど、どうしてそれを!!」

詰問するまでもない。狼狽した父親は、裏返つた声で自白した。

内緒話の女生徒たちを締め上げて聞き出したのは、父親の借金と給金の前借りだった。無礼なことをと憤つたものの、その中に財務担当大臣の娘がいたため信憑性が高く、こうして本人に確かめざるを得なかったわけだけど、まさかこうもあっさり認めるなんて。呆れるよりも情けなくなる。

「どうしてそんな……。王宮からは、十分な研究費をいただいているはず」

「ま、まあ……そうなんだが……」

父親が、ちらりと研究室の隅に視線を向けた。そこにあるのは、山のよう

に積み重なった稀観本やレアメタル。

「まさか……」

「し、仕方ないだろう! 全然足りないんだ! この本も素材も、正規の給金じゃ手に入るのは何年も先だ!」

娘相手に必死の形相で弁明する父親に頭を抱えた。研究馬鹿だとは思っていたが、よもや使い込みをするような愚か者だったとは。

「その研究費は、国民の貴重な血税です! お父さまの道楽のお小遣いではありません!」

「お、お小遣いとはなんだ! だいたいの、親に向かってなんて口のきき方を……ひいつ、ごめんなさい!」

マリイが拳で机をバンと叩くと、激昂しかけた父親は踵み上がった大人しくなった。

「はあ……」
大きな溜め息が出る。いくら娘が怒っているとはいえ、多少は親らしい威厳を見せて欲しかったのに。

「……仕方ありません。その本は返却しましょう」

「そ、それは駄目だ！」
すると父親は急に蒼褪め、本を庇うように両手を広げた。

「お父さま、往生際が悪いです」

「そうじゃないんだ！ 返本なんて要
求したら……殺される！」

「……はあ？」

マリイの眉が怪訝に歪んだ。どこの世界に、返本ごときで客を殺す本屋があるんだろう。

「そうじゃない！ 問題は返本じゃなく、返金の方で……」

「さては、よほどおかしな筋から入りましたね？」

語尾が小さくなる父親をひと睨みすると、彼はうつと言葉を詰まらせ、そして諦めたように白状した。

「に……西の森の魔女からだ」

「お尋ね者じゃありませんか!？」

「違う、騙されたんだ！ あいつは、ただの古書業を装って、本を法外な値段で売りつけてきたんだ！」

個人で大きな力を持つ魔道士は、全員が公の機関に属さなければならぬと、法で定められている。

しかし中には、管理されるのを嫌う者もいた。その多くは人心を惑わし、悪事に手を染めているという。そのため、在野の魔道士は取り締まりの対象か、あるいは賞金首となっていた。

西の森の魔女も、そのひとり。悪質な詐欺と人身売買の噂もあり、高額な賞金がかけられている。

そんな大罪人に宮廷魔導師が関わったなど、前代未聞のスクandalだ。
（お父さまの場合は、自業自得のよう
な気がしますけど）

値段はともかく、現にこうして貴重
な本や資源を手に入れているのだから、
まるつきり騙されたわけでもない。

「とはいえ、在野の魔道士となれば違法は違法。この私が、腕試しを兼ねてお父さまの敵を取って見せましょう」

「それでこそ我が娘だ。頼む、私のために金を取り戻してきてくれ！」

父親の名誉など知ったことではないが、家名に傷がつくのは許せない。

彼が本を買ったのは、町はずれの古道具屋だという。しかし、道沿いにそれらしい店は見つからない。

「本当にこの辺りなのかしら？」

父親の言葉を疑い始めたマリイは、大きな川にかかる橋の手前でいったん搜索を中断した。

この先は、通称「ならず者の街」。その名の通り治安が悪い。いかがわしい店も多いと聞き、貴族が足を踏み入れるべき場所ではない。

「どうして王都にそんな地域が……。後で王様に言上して浄化しましょう」

ごろつきなど、魔術の前では物の数ではない。マリイは、黒ローブを幻視の魔法でポロ切れに変えると、それを纏って橋を渡った。

「……もつと汚いところかと思っ
たのに、意外と綺麗ね」

行き交う者たちは、いかにもワルですという面構えばかり。石畳の道端にもゴミが吹きだまっている。居並ぶ店
だつて、派手で下品な色遣い。

その割に、着ているものは小綺麗だし、建物にも目立つた破損はない。想像していた貧民街ではなく、違法な手段で儲けまくっている街のようだ。

「となれば、この変装は失敗ね」
ポロを纏っていたら、逆に悪目立ちする。急ぎ足で路地に逃れ、他の女を参考し、真っ赤なマントに変更した。

「私の趣味じゃないけれど……」
それでも一応、目立つ金髪を隠して搜索を続行する。しかし人に道を尋ねても、手掛かりを得られない。

「ここではないのか、よそ者を警戒しているのか……」

ふと、別の可能性に思い当たった。魔女の店だ。普段は隠されているのかもしれない。マリイは辻々で立ち止まり、魔法の痕跡を探る。何度目かでそれらしい気配を感じて走り出した。

「こんなところに……」

そこは裏路地の、なんの変哲もないレンガの壁。しかしマリイの目には見えていた。魔力で作られた通路のようなもの。怖れず壁に向かって足を踏み出すと、強烈に吸い込まれる感覚に身体が包まれ、次の瞬間には、まったく別の場所に立っていた。

さつきまでの石造りの街とは趣の異なる、自然の匂いのする木の家の中。壁は太い蔦だし、窓の外の向こうには深い森。いや、この家が森の中の広場にあるのだと即座に把握した。そして探していた店であることも。父親が持っていたのと同じような本や石が、棚にぎっしり並んでいる。

「あら、お客様？」
急に背後で声が出た。慌てて振り返り、再びギョッと驚かされる。

そこには、黒ずくめの女が立っていた。長身で、腰まで伸びた癖のある黒い髪。羽織ったローブも長く、引き摺った裾がほつれている。やはり黒一色の服は胸元が大きく開き、乳房の白さと、そして、はちきれそうな膨らみと深い谷間を際立たせていた。

（下品な……）
やはり露わな白い太腿に眉を顰めながら、しかしマリイは、彼女の容貌に息を飲んでしまった。愛嬌のある垂れ気味の瞳が笑ったように細められ、ぼつてり厚い唇は、まるでキスを誘っているように半開き。同性なのに、その色っぽさに惹きつけられそうになる。

「なるほど……。あの馬鹿父が簡単に騙されるわけだわ」

短編の時によくあるのですが、つい、長編で書きたくなります。今回は特にキャラを作り込みすぎて、このページ数では物足りなくなってしまうかもしれません。

とはいえ、性欲を持って余した青少年
 じゃあるまいし、女の色香に惑わされ
 るなんて。父親の不甲斐なさに唇を曲
 げるマリィに、女性が首を傾げた。

「お嬢さん、あの通路を抜けて来たつ
 てことは魔道士でしょ？ わたしに用
 じやないの？」

「そうだ。マリィは彼女に用がある。
 「お尋ねしますが、あなたが西の森の
 魔女さん？」

「その通り。サンディアというの」
 お尋ね者のくせに、平然と名乗る彼
 女の愚かさを心で嘲り、マリィは杖を
 振った。先端の魔石が輝き、鋭い刃
 となった風が魔女を襲う。

「おっと」
 しかし彼女は、手にした杖を横薙ぎ
 に振っただけで、マリィ渾身の一撃を
 軽くないした。

「な、なんですって……!?!」

目を剥いた。自分の攻撃がまったく
 効いていない。それに彼女の杖。学園
 の魔術士が持つ洗練された金属製では
 なく、背丈より大きな、木を荒削りし
 ただけの粗野な造形。魔石も原石のま
 まなのか、マリィの杖のそのの、倍以
 上の大きさがある。

「ちよつとお、不意打ちなんて卑怯じ
 やない。それが王立学園の流儀？」
 「あら、ばれていたの」

「だって、その赤マントの下、学園の
 制服のままよ？ 幻視をするなら、ち
 ゃんと内側まで気を使わなくちゃ」
 魔女はマリィの服を指差しながら、

まるでファッションセンスを指摘する
 ような感覚で微笑んだ。攻撃を返され
 ただけでなく、ローブにかけた幻術ま
 で見破られている。

「なら、遠慮はいらないわね！」
 マリィは幻視を解き、もう一度杖を
 振って風を放った。それは室内で荒
 れ狂って棚を破壊し、サンディアを窓
 から外に吹き飛ばした。

「やった……!」
 しかし彼女は、まるでそよ風に運ば
 れたように、草むらの上にふわりと降
 り立つ。

「学生さんで黒ローブとは大したもの
 ね。でも、わたしには通じないわよ」
 ウィンクまでする魔女の余裕で頭に
 血が昇ったマリィは、後を追って破れ
 た窓から飛び出した。そこが森の中で
 円形に開けた場所であるのが分かった
 けれど、今はどうでもいい。

風、水、炎。マリィは何度も杖を振
 り魔法をぶつける。サンディアはその
 全てを、涼しい顔で弾き飛ばした。

「野良魔女にしては出来ませうこと」

「口が悪いお嬢様ね。ホントに学園の
 生徒さん？」

挑発も、サンディアは軽い嘲笑で受
 け流す。マリィは、悪態の裏で戦慄し
 ていた。魔女の小馬鹿にした態度も神
 経を逆撫でするけど、それ以上に、自
 分の魔法がまったく通じないのが信じ
 られない。こんなことは初めてだ。

（弱気なんて、私らしくない！）
 エリート中のエリートたる自分が、

ならず者の三流魔女ごときに負けるわ
 けがない。背中を流れる冷や汗を無視
 し、杖を突き出す。

「そんなにピリピリしないで、お嬢さ
 ん。まずは名前を覚えて。それから襲
 う理由を聞かせて欲しいな」

小首を傾げてサンディアが尋ねてく
 るけど、答えない。答える余裕がなか
 った。魔弾を無駄撃ちしすぎて、もう
 体力が底を突こうとしていた。

（残った力を全部……炎でぶち込んで
 あげるわ！）
 最後の一撃で仕留めようと、先端の
 魔石に力を込める。しかし、サンディ
 アの杖でも同じように魔力の蓄積が行
 われている。しかも魔石は、マリィの
 ものより大きい。真つ向からぶつかつ
 たら勝利は危うい。

（あんな杖、ハッターよ！）
 実力は自分の方が遥かに上。そう自
 分に言い聞かせていたら、サンディア
 が半歩、足を前に出した。気を張り詰
 めていたマリィは、その動きに惑わさ
 れ、反射的に炎を放つ。

「素直なお嬢さんねえ」

「し、しまつた……!」
 それが彼女の作戦だと気づいた時に
 は遅かった。巨大な魔石が輝き、炎を
 はね返される。マリィの足は疲労でも
 つれ、それを避けきれない。

「さやあああああつ!!」
 炎がローブに燃え移る。慌てて投げ
 捨ててから我に返る。あれは一流の魔
 術士の証。それを自らの手で放棄する

なんて。しかも、今ので魔力は打ち止
 め。マリィは誇りの一部が焼けるのを
 成す術なく見届けるしかなく、己の不
 甲斐なさに唇を噛む。

「さてと……。どう落とし前をつけて
 もらおうかしら」
 黒い編み上げのサンダルが、項垂れ
 た視界に割り込んだ。顔を上げると、
 サンディアが蔑んだ目で見下ろしてい
 る。本当なら立場が逆になるはずなの
 にとすると、腸が煮えくり返る。

「いい目をしてるわね。さすがはマル
 ム家のお嬢様」
 息が止まった。この魔女はマリィの
 正体を知っている。知った上で相手
 をしていた。

「まさか……私が来ると知っていて
 あらかじめ対抗手段を……!」
 「父親の敵討ちのつもり？ あれは正
 当な取引だからね」

「誰がお尋ね者の言葉を信じるもので
 すか！」
 マリィの非難に、魔女が呆れた顔で
 苦笑いする。

「それはそつちの都合でしょう。こつ
 ちはこつちで自由にやつてるだけなの
 に。なんにしても、貴重な古書や資源
 が大量に無駄になったわ。あなたに弁
 償できるの？」

「馬鹿にしないで！ そんなもの、マ
 ルム家の財力をもつてすれば……」
 言いかけてハツとなる。使い込みが
 問題視されているのに、弁償の肩代わ
 りなんて王宮に頼めるわけがない。

「えっと……その、それは……」
困惑するマリイに、サンディアが、勝ち誇った笑みを浮かべた。
「なら、身体で払ってもらおうかな」

数時間後、マリイは、変わり果てた己の姿に茫然としていた。
「どうしてこんなことに……」

彼女の言葉は、文字通りの意味だった。連れて来られた店の、扇情的な半裸の女性が描かれた看板に蒼褪める。
「まさか、ここって……」

「おや、お嬢様でも分かるんだ。ご想像の通り、あなたには、ここで娼婦として働いてもらうわ」

「この私に身体を売れというの!?!」
冗談じゃない。貴族の娘がそんなことできるわけがない。反抗すると、彼女は借用書突き出した。そこには払いきれない金額と、マリイのサイン返金要求に来たはずなのに、魔女の姦計に嵌まって、借金を増やしてしまう羽目になってしまった。

「そんな恐い目で睨んでも無駄無駄。その首輪で魔力を封じられた今、あなたは普通の小娘に過ぎないんだから」
マリイの首には、鍵穴つきの首輪が嵌められていた。これには魔女の呪いがかかかっていて一切の魔法が使えない

「じゃ、がんばって稼いでねー」
そう言っ、サンディアは立ち去った。もちろん逃げようとしたけれど、店の者たちに捕まって、制服どころか下着まで剥ぎ取られた。裸でいるわけ

にもいかず、やむを得ず着替えた衣装は、戦慄を覚えるものだった。
フリルを多用したビスチェと下着

あとは透けた薄絹のガウンのみ。どこからどう見ても商売女の装い。こんな格好、学園の者に見られたら生きていられない。と、思っていたのに。
「まあ! 本当にマリイ様がいらつしやつた。んふ、素敵なお召し物」

「あなたは……」
ベッドひとつの狭い個室で待機していたら、知った顔が入ってきた。マリイに父の借金の話を聞かせた、財務担当大臣の娘だ。

「先日の決勝では、兄が大変お世話になりました。まだ重傷で動かせませんが、命に別条はありませんから」
あの子の名前も思い出せないとか、そんなことはどうでもいい。

「あなたが私をこんな目に遭わせるために仕組んだの? 兄様の敵討ち?」
「まさか。マリイ様がここで働かれるなんて、さつき店長から聞かされるまで知りませんでしたわ」
そして彼女は、うっとり目を輝かせ始めた。

「あなたが兄を打ちのめした姿に、わたくし、感動してしまつて……。恋したと言つても過言ではありせんわ」
そう言いながら制服を脱ぎ始める。マリイが呆気に取られている間に下着まで取り去り、瞬く間に全裸に。
「ちよ……ちよつと待つて、なんのつ

もり? ……いえ、そもそも、どうして女のあなたが娼館にいるの?」
「あら聞いていませんの? ここ、女性相手の娼館ですよ。そして、わたくしは常連客」
「そんな……」

茫然となる。これからマリイは、同性の慰みものにされるのか。
「やはり、男性がよかつたのです?」
尋ねられ、想像したら嫌悪感で身震いした。だからと云つて女の方がいいという問題でもない。

「それよりマリイ様、お客を迎える態度がなつていませんわ。ご挨拶すらないなんて、躰がなつていませんの!」
「え、あの……ごめんさい」
マリイは同級生の叱咤に辣み上がった。魔法を奪われただけに、自信の拠り所がないことが、こんなにも心細いことだなんて。怯えるマリイに、彼女は欲情丸出しで微笑んだ。

「心配いりません。わたくしが一から教えて差し上げます……」
言うなり、彼女はマリイの頬を両手で挟んだ。咄嗟のことに反応できず、あつさり唇を奪われてしまう。ふわりと柔らかな感触が、むしろ背中に悪寒を走らせる。

「ん……んな、なにをするの!?!」
堪らず彼女を突き飛ばし、唇を腕で拭う。そうして初めて、初めてのキスを奪われたのだと理解した。こんな名前も覚えていないような女の子に、愕然となるマリイを、彼女は熱い眼

差して見つめた。その沸騰するように濡れた瞳に、逆に身震いするほどの寒気を覚える。
「いいですわあ。まだ自分が商品だと自覚していないその態度。んふふ、調教し甲斐があるというものです」
「ちよ、調教!?! このマリイ・マルムに向かつて無礼な物言いは……!」

彼女は、怒りをぶつけられているとは思えない笑みで、制服のポケットから、親指ほどの小瓶を取り出した。
「これ、わたくしが作つた魔法薬。このお店に頼まれ開発したものですわ」
説明しながら、彼女はガラスの蓋を開け、毒々しい赤みの液体を、一滴伸ばした舌に垂らした。

「ちよつと、大丈夫なの!?!」
「ひと舐めだけなら、女性がとつても気持ちよくなれるお薬です。でも、ひと瓶まるごと飲んでしまうと、効きすぎて……んふ、どうなつてしまうのかしら。あなたで試させてくださいな」
その妖しい笑みの意味を瞬時に悟つて、マリイは震えあがつた。これは媚薬だ。過剰摂取は人格崩壊を招きかねない。そんなものが、この店に大量にあるのだとしたら。

「言うこと聞かない悪い娼婦さんは、壊されちゃうかもしれませんわー」
可愛い声で、さらりと怖いことを言う。大人しくなつたマリイに、彼女は改めてキスをしてきた。しかも今度は舌まで。口腔に入り込むるりとした異物に虫唾が走る。



そうは
言うけど

アタシは
人間を気持ち良く
してあげてるのよ?



この
サキユバスめ!

人間に手を
出しやがって



いいところ
邪魔して
くれたわね



あんたを
気持ちよく昇天させて
あげてもいいのよ?

ホラッ
どうせなら

勇者相手に
たつぷり稼げる!?

サキユバス姫帰 レクリベンジ

漫画
COMIC

SHUKO





またアタシと遊ぼうね♡

ねえ？



よし

絶対次もフリージアちゃんを指名するからねー

人間相手だと程々で搾り取れるな



これなら楽勝かな

早くお金も貯まりそう



あの後――

気持ちいいサービスしちゃうからっ

本当かい!?

なんとか近くの街について魔術屋を覗いたけど

次はもっともーっと





盗んできた
お金じゃ全然
足りないじゃないの

えっ
人間の薬って
こんなに高いの!?



あんたなら
仕事柄稼げる
のがあつよ

…はい



もうちょっと
安いのは
どれだろ…

お前さん
金ないのかい?



力が十分じゃない
今だって
普通の人間相手なら
このくらい余裕だわ

店先で男を誘って
男の望むがまま
精を搾り取る



「娼婦館
フラワー」?
そう
普通に働くよりも
破格の金になるよ



娼婦か…
いつもとやる事と
変わらないし
いいかも

1ヶ月くらい続ければ
あの薬も買えそうね



コッ...

さて
次の客でも探...

あらあつ...

どっかで
見た顔だなあ

...お前!!

人気の嬢だっ
ていうから
来てみれば

人間相手には
落ちぶれたなあ

元はといえば
お前のせいなんだよ

こつで殺して
やってもいいんだぞ!

待て待て

今は俺が
客なんだ

フワッ

フィンドウ エンジェル 梨羽

寝取られた娼婦捜査官

恋人を守るため、娼婦に身を墮とす
女捜査官・梨羽!



あまとゆうき
小説 天戸祐輝
NOVEL

えもり
挿絵 江森うき
ILLUSTRATION

過去に起こされた幾多の麻薬撲滅運動。

その結果、現存する麻薬は二十世紀とは比べられないほど激減した。

二十二世紀の現在、人の身体に害を及ぼす麻薬はほぼ存在していない。

だが、人を蝕む麻薬はその形を変え、さらに進化していた。

フィンドウ。

新型麻薬の中毒者、そしてその薬そのものを指す悪魔の名。

その悪魔の名を冠した犯罪者たちは闇に潜むこともなく、堂々と存在し人々を魔の信徒に変えている。

日本近海、太平洋上に造られた人工島アンラ・マンユ。

各国の犯罪者が潜伏するこの無法地帯に、新型麻薬を撲滅させるために三人の少女が潜入していた。

「やっぱり、あの娼館が怪しいみたいね」

「そうね、でも今の私たちでは潜入することも難しい」

大人びた二人が怪我を庇いながら呟いた。

新型麻薬ハレイドバッセス。

その調査を新政府に命じられた対フィンドウ組織ゾフィーエル。

その組織に所属する彼女たちは三日に及ぶ捜査を終え、車の中から一つの娼館を眺めていた。

「先輩、本当にあの娼館に新型麻薬常習者、フィンドウが入っていったん

ですか？」

三人の中で一番年下の少女が先輩捜査官、通称エンジェルに話しかけた。

幼さを残す卵型の輪郭に大きな黒い瞳、そして鼻筋も通った彼女は、日本的な容姿をもった美少女だ。

長い黒髪も掃き溜めのようなアンラ・マンユでは珍しく、誰が見ても清純と呼べる存在。

そんな彼女が白いブラウスに黄色いリボンタイ、青いミニスカートに紺のニーソックスという姿で車の中に居た。

「普通の娼館のようですけど……」

可愛らしく小首を傾げて尋ねる。

「梨羽よく見てみなさい。初任務だから分らないでしょうけど、あの男、どう見てもフィンドウでしょう」

「……たしかに、見た目だけなら特有の症状が見えますけど」

娼館に向かう男を見ながら納得する。

新型麻薬、ハレイドバッセスの常習者には昂揚感のほかに二つの特徴がある。

一つは肉体の強化、そしてもう一つが激しい性衝動だ。

目の前を通り過ぎ、娼館ナアマに入っていく男は筋肉を異常に隆起させ、その症状を現していた。

「しかも、あの男は禁断症状がでているわね」

「やっぱり、あの中で売買が行われているのは間違いないな」

二人の先輩エンジェルが怪我をしてまで手に入れた情報、その正確性は娼

館に入っていく客が物語っている。

だが場所が場所だけに調べづらい。男性のみで構成されたヴァーチャーズならともかく、梨羽たちは女性のみで構成されたゾフィーエルだ。

客として中に入り、証拠を得ることなどできない。

「あの中で売買ですか……でも今の状況証拠だけで本部に戻っても、誰も動いてくれませんよ」

「そうですね……それで梨羽にお願いがあるのだけど……」

「はい、なんでしょう？」

「娼館の潜入、行ってもらえる？」

「……？」

一瞬意味が分からなかった。

だが徐々に言葉の意味が分かり、顔を真っ赤にさせて頭を混乱させる。

「え？ あ、あの……えええっ!? む、無理ですつ、むりむりつ、だ、だってわたし、まだ男の人とそんな……」

捲し立てるように言うが先輩たちの目は真剣だ。

この情報を逃すわけにはいかない、とまっすぐ見つめられる。

「梨羽、今あの娼館を調べないとハレイドバッセスが蔓延してしまうわ」

「それは……それは分かっています、でも、拓海さんにもまだ……」

恋人の名前を出して断ろうとするが、断った時のリスクが頭をよぎる。

(娼館に潜入するなんて嫌だけど、もしわたしが断ってしまったらハレイドバッセスが蔓延して……)

新型麻薬の拡散が防げなくなるのは確実だ。

しかも肉体強化作用のある新麻薬、これを見逃したら全世界の治安が悪くなるのは必至だった。

「梨羽にこんな任務頼みたくはない。だが、今の私たちでは……」

もう一人の先輩エンジェルが唇を噛み締めた。

もし怪我をしてなければ、自分が娼婦として潜入する気なの分かる。

「潜入しなければいけないのは分かれます……、ですが……」

「拓海さん!!」

突然、車の通信機から恋人の声が聞こえてきた。

どうやら迷っている梨羽を潜入する気にさせようと、先輩エンジェルが通信を繋いだらしい。

「梨羽、俺が最初の客になつてやる。こんなところで嫌だろうが、ここは我慢してくれ」

「つゝ……、卑怯ですみんなっ」

恋人の言葉、そして思惑どおりな笑み先輩たちの姿に、梨羽は頬を膨らませながら車を出た。

※

娼館ナアマ内部の一室。

大きめのベッドにシャワーやトイレ、大きな鏡やソファアームまで設備されたそこは、まるで高級ホテルの部屋を連想させるつくりだった。

(あっさり潜入できましたけど……)

不安を感じながら部屋を見回す。
いきなりの入店で断られると思つたが、ある検査を除いてはほぼノーチェックで娼婦になれてしまった。

しかも梨羽はその容姿もあつて、一時間の値段が十万を超える高級娼婦としてのランクだ。

その所為で、こんな豪華な部屋を与えられている。

(いやらしい手でスリーサイズを測られたり、男性経験まで聞かれた最低の検査でしたけど、この部屋なら自由に動くことができそうですね)

この部屋には死角になる場所が多く、娼館を調べるために抜け出すことが簡単にできそうな構造だ。

持ってきた装備も奪われることはなく、梨羽は車に居た時と同じ服装、そしてソフイーエルに所属するエンジン専用装備まで持つている。

(さて、早速調べさせてもらいますね) 部屋を見回した時に確認した隠しカメラの死角に身を隠し、粒子化させてある装備を取り出そうと小型通信機の立体モニターを出した。

「梨羽さん、お客様が付きました。高額なあなたを一日もお買い上げです」
「っ!?!」

買われた、という言葉に一瞬ドキリとなった。
だがすぐに自分を買った人物を思い浮かべる。

「あの……、わたしを買った人の名前は……?」

「タクミ様です」
(よかった……)

恋人の名前にほっとする。

監視されている以上エッチなことをしないわけにはいかないが、相手が拓海ならここで初体験も悪くない。

「匂い、大丈夫でしょうか……?」

ブラウスの胸元を開けて確認する。体臭には気をつけているが、さつきまでいたのは車の中だ。少し汗の匂いがする気がした。

「シャワー浴びれば大丈夫ですよ」
恥ずかしさと初エッチの不安を感じながらドアに背中を向けて待つ。

(あと少ししたら拓海さんがきて、あのベッドで……)

少しエッチだと思いがら、心臓の音を抑えるように胸元を握った瞬間。ガチャッ……。

背後のドアが開かれた。

「た、拓海さんっ」

満面の笑みで振り返った。
「娼婦にそんな笑顔で迎えてもらったのは初めてだよ」

「え……?」

目の前に居た男の姿に笑顔が凍り付いた。
部屋に入ってきたのは拓海ではなく、巨漢で少しお腹の出た牛のような男だ。

短い髪はちゃんと整えられ、紳士のような雰囲気のある男だが、梨羽が思い浮かべていた相手ではない。

「ま、待つて……拓海さんでは……」
「ああ、タクミだ。よろしく頼むぞ」

「頼むつて……きやつ」
突然抱き締められ、ブラウス越しに胸を揉んできた。

「ま、待つて……や、くう……」

初めて受ける胸の刺激に唇を噛んで耐える。
だが男の手は適度な力で柔房を包み、内部を刺激するように形を歪ませてきた。

「んっ、はあはあ、なんですこれ……、胸がくすぐつたくて……」
洩れそうな吐息を堪え、赤く染まつた顔を振る。

しかし唇を噛み締めれば噛み締めるほど、感じたかと思えば思うほど柔房がムズ痒くなっていく。

「んう……、はあはあ、やめ……、そんなに強く採まないと駄目だよ……」
拒否の言葉を飲み込み、愛撫の手を緩めるように頼んだ。

ここで武装を出して相手を拒絶することはできるが、今それをやってしまつたら潜入が台無しだ。
フィードバックの情報を隠され、組織の名前を知ることもできなくなる。(こんな人にわたしは……)

「んむっ?! んんん——っ!」
犯される、と思ひ相手の顔を見ようとした瞬間唇が奪われた。

分厚い唇は梨羽の小さな唇を押し開け、唾液まみれの舌をヌルリと滑り込ませてくる。

(いきなりキスなんて……嫌、やめて……やめてください……っ)

分厚い舌が口の中に入り、梨羽の小さな舌に絡まってきた瞬間涙がでそうになった。

キスの経験はあるが、拓海としたのは唇が触れ合う程度。
舌を絡ませ、唾液を食られるような激しいキスはこれが初めてだ。

「んううっ、むふっ、んん……んろ……んむ、んんん——っ!」

舌同士が擦れ合うキスは頭の芯を痺れさせ、胸の刺激と共に梨羽の身体から無駄な力を奪っていく。

「んん、んむ、んっ……んう……んあ……はあはあ……ああ……」
「すまないな、あまりに可愛らしかったので我慢できなかった」
窒息してしまいそうな息苦しさの中、突然キスを終わらせたタクミが優しい顔で囁いてきた。

「い、いえ……はあはあ、慣れてないので……んっ、すみません……」
「そういえば処女だったな」
「はい……んっ」

娼婦として答えるが、キスと初めての胸の刺激に身体が燃えているように熱い。
下腹部はキュンキュンと疼き、膝が震えて立つていられない。

「高い金を払った甲斐があるな、俺が一人前の娼婦になれるように調教してやるよ」

「娼婦つて……えっ、あ……ダメです……きやああああつ」
いきなりタクミに抱きかかえられた

「……」

梨羽はベッドに押し倒され、ブラウスの胸元を肌臙させられた。

ボタンを数個残してピンクのブラを覗かせた胸元には汗が浮かび、これから行われる恥辱に揺れる。

「お客様……、ら、乱暴なことはいけません……」

「最初に俺が気持ちよさを教えてやる、おまえが奉仕するのはその後だ」

「な、なにをするつもりで……あつ、見ないで……ダメ……あああつ」

ブラがずりあげられ、ちゅばつと音を鳴らしてEカップの胸が吸われた。

梨羽は初めて男に見られる丸い柔房に恥ずかしさを覚え、幼さを残す顔が急速に染まってくる。

「んっ、あつ、そんなに乳首吸わないでください……あああつ、噛まないで……はああ、くすぐったくて……」

「いい大きさだ、乳首も薄いピンクで、さすが処女だな、かぶつ」

「ふあああつ！ あうっ、おっぱいが痺れて……んう……っ」

胸を揉み舐められ、甘く噛まれて尖っていく乳首の刺激に身体がビクビクと震える。

「んはっ、あああつ、胸が……あああつ」

「どんな感じだ？」

「くすぐったいんです……ひゃんっ、乳首から胸全体がすぐくすぐったくなって……、はああ、乳首しゃぶら

れるとすぐく痺れて……あんんっ」

「どれくらい大ききなんだ、大きいのに乳首が小さくて綺麗すぎるぞ」

「そんなこと言えませんか……っ」

カップ数まで知られる恥ずかしさに顔を背けて拒む。

「ん？ 娼婦のくせに乳房の大ききさも言えないのか？ おまえ、もしかして娼婦じゃ……」

「っ?! ここで疑われたら……」

潜入がバレるだけでは済まない。ハレイドバツセスを調べていることは当然知られ、最悪外に居る先輩たちも囚われてしまう。

「八十三のE……です……あんっ、ダメ……おかしくなります。胸を揉まれると息苦しくて……はああ、乳首舐められるとビリビリして……」

「これが愛撫の気持ちよさだ、娼婦なら覚えなければならぬ感覚だぞ」

正体を隠すために答えて感じている感覚も伝えた瞬間、タクミはスカートを手を差してピンクのショーツに手を差し込んだ。

「きやあああああつ！ な、なにをするんですか」

「具合を確かめたくてな」

「具合って……っ、そこは……ひゃうう、あつ、ひゃんんん——っ！」

大きな手がショーツを膨らませて無毛の下腹部を撫で、クリトリスを弄りながら淫唇を上げてきた。

敏感な肉芽からは弱電流のような痺れが走り、淫唇を開かれるムズ痒さと

共に梨羽を混乱させる。

「んあああつ、あひっ、そ、そこまだ誰にも……んひっ」

指がクブツと膣口をくぐり、汚れのない膣壁を擦ってきた。

「あああああつ、あひっ、お腹の中を擦って……はあうううっ！ こんなのおかしくなつて……あああつ、はうっ……んっ、あんんんっ」

瞬く間にショーツの色を濃く変え、初めて感じる刺激にベッドでのたうち回った。

しかし、どんなに逃げようとしてもタクミの力で仰向けに戻され、胸と陰部の刺激で身体を痺れさせられる。

「あああつ、あひっ、やめ……そんな全部なんて……あああつ！ そこダメ……アソコの突起は……」

「どんな気分だ？ おっぱいとオマンコを同時にさわられる感じは？」

「んは……はああ、し、痺れます……やんっ、乳首や胸をさわられるとすぐくすぐったくて、アソコは変になりそうなんぼムズ痒くて……っ」

答えたくない質問だが、潜入が疑われないように答える。

処女のまま感じる快感を言葉にする羞恥に梨羽は悲しみに襲われ、今にもここから逃げ出したいとなった。

「処女でそんなに感じるとは、娼婦になるだけはあるな。ここはどうだ？」

指を膣に挿入したままクリトリスを親指で擦ってきた。

「んあああああつ、あふっ、あつ、

ひいんんん——っ！」

包皮を剥かれ、敏感な女芯を擦られた刺激に体重が一瞬消えたような気がした。

膣口からは愛液が音を立てて吹き出し、タクミの手を濡らしていく。

「んああ……痺れて……あんんっ、い、今のつて……んうっ……はあああ」

「軽くイッたみたいだな」

「わたしがイッ……」

急に恥ずかしくなった。

好きでもない相手の愛撫でイッたことに罪悪感を覚えながら、本来ここにいるはずの恋人を心に思い浮かべる。

「俺の手がこんなになつてるぜ」

「見せないで……」

目の前に掲げられた手に、恥ずかしさしか覚えない。

タクミの手は愛液にまみれ、照明を反射させてキラキラと光っている。

「今度は俺の番だな、その口でチンポをしゃぶつてくれ……」

「なっ?! そんなこと……」

「できないのか？ 娼婦のくせにサービスが悪いな。それとも、本当に娼婦じゃないのか？」

「ち、違います、わたしはえ、エッチなこと興味があつて娼婦に……、ただ、初めてだから……」

拒みたい気持ちを必死に抑え、ベッドから降りて縁に腰をかけたタクミの前に跪く。

「タクミさん開けますね……きやっ」

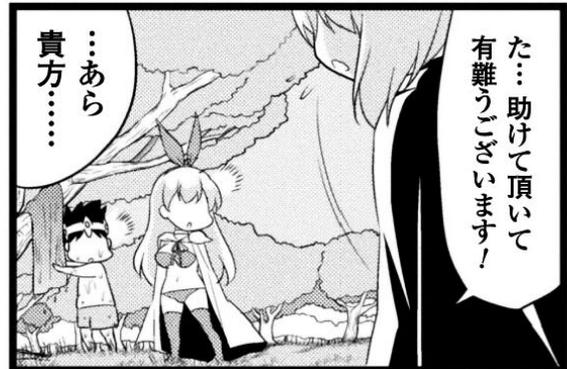
またまたお久しぶりです!



女の敵には容赦ない



謎ありの娘



辺境にある
小さな娼館：

おねがい：
娘には乱暴
しないで：

ワガママは
通用せんぞ

今夜餌食に
なるのは……？

【ばんさん】 晩餐 とけーうさぎ

漫画
COMIC

オイこの女
妊娠してるぞ

村を追われ宿を求めて
訪れたのがこの館とのこと

腹を数回殴りつけたら
素直になりましたよ

まさかお目に
かかることすら難しい
エルフが母娘で
抱けるなんてねえ

領主様方に真っ先にご提供
しなければと思ひまして：

勿論だ
母親はここで
一生働かせる

ガキのほうは
我々が買い取るぞ

おねがい
一晩で見逃して
ください……っ

立場が分かって
いないようだな

今日から
お前らは娼婦なんだよ



そんなに大事かい
誰と交尾したんだ？

お腹は…
お腹はどうか…

無事に産まれると
いいねえ…ククク



お嬢ちゃんにも
セックスを教えて
あげるからね

モイナ！

ママあー！

…では
こゆっけりど…



こ…こんな
大きいの…っ

ワガママ言うと
ママが痛い目に
遭っちゃうからね



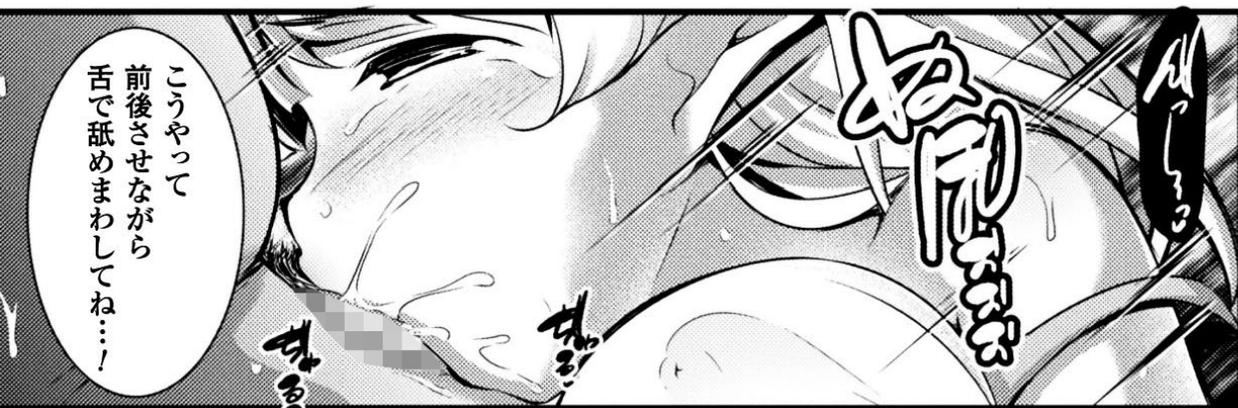
おびえなくても
悪いようにはしないさ

ちゃんと勤めを
果たせばな

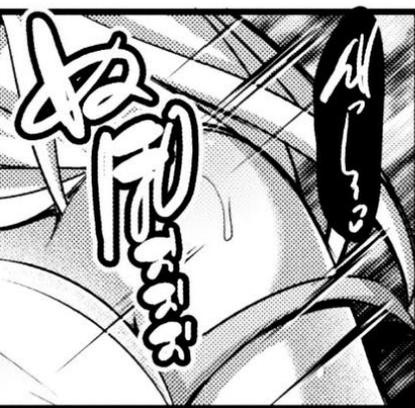


できるだけ
奥まで啜えて

そうそう
べろべろして
濡らしたら...



こうやって
前後させながら
舌で舐めまわしてね...!



おお...中々
上手だぞ...っ



なんか出てきた...しぼっぱい



熱くてくさい...男の人のにおい...

抵抗しなければ
大事に抱いて
やるからな

いい目だねえ

娘は素直
じゃねえか

ホラ
おとなしく足を開きな
チンコでほじくって
産ませてやるから

ものすごい体臭…
興奮した息が臭い…

エ…エルフのカラダには
魔法が掛かっているって
本当かもな…

こんなに反り返って
入れる前から
興奮で息切れしそうだ

ヘタクソフェラの
クセにチンコが
溶けそうだけエ…

マンコが
甘くてうめえ

すごい…こんなに
そそり立って大きい…

子宮まで届いて
しまつたら…っ



お嬢ちゃん…っ

あーっ
あーっ
あーっ



こりや将来
有望だぜエ…

ん…っ
しょっぱくて……
おいしいです…
生臭いけど…

お味は
どうかな？



あーっ…あーっ
オイオイ…
膣内どんな
作りしてんだよ…

うう…
深い…
ほうやに
届いちゃう…っ

ヒタが絡んできて
奥に行くほど
複雑に締めてきやがる…！
この女はオレ専用
にじっくり調教してやる…！



ほら
しやぶって

すごい汗…
ニンゲンの男の
におい…っ

だめ…
だめよ…っ

何がダメなんだ？
フェラチオ知らない
わけじゃねえだろ？



はあ…はあ…
ううあ…っ

おいおい
挿入れられただけで
ずいぶん呼吸が
荒いじゃないか



クラクラする…
気を失いそう…っ



へへ…
結構上手いじゃ
ないか

ひあひあ…



おおうお…
喉まで深いぜ…

そうそう
ノドでキスして…っ

アスタシアの ひめがみ 7人の姫女神 淫紋の烙印

第2話

小説 NOVEL ちくまじゅうこう 筑摩十幸

挿絵 ILLUSTRATION ぐるいわしんじ

原作 さくらざわひろ 桜沢大

最強姫女神姉妹の身体は
淫らに改造され……

「へへへ。順調順調」

勃起を引き抜いて満足そうに嗤うロキ。あれから二日間、牢獄に呼び出されてはブリュンヒルデを犯しまくり、邪精を何度も何度も膈奥に中出しした。

「さあ、キスですよ」

「はあ……あうん……ロキ、様」

全身を汗とザーメンまみれにされたブリュンヒルデが、従順に唇を重ねてくる。舌と舌を絡ませ、混ぜ合わせた唾液を嬉しそうに飲み干す。これだけ犯せば身も心もほぼ完全に支配できているだろう。

「さて、あとはアナスタシアだ。フーフ、今頃俺様の仕掛けた罠に嵌まっている頃だ」

偽情報でおびき出したヨトウンヘイムには、女神の力を封じる結界が張り巡らされ、さらにヨルムンガンドやフエンリルに匹敵する魔獣が十数頭待ち構えているのだ。

「まあ、結界が強力すぎて、明日まで俺も手を出せないのは残念だが……」

無残に打ち倒されたアナスタシアの姿を肴にしながら酒瓶をあおる。

「何がそんなに可笑しいのですか？」

「そりゃあ、生意気なアナスタシアに……つて!!」

振り下ろされた神速の斬撃を紙一重でかわすロキ。そして淫気に濃んだ目がカッと見開かれた。

「な……アナスタシア……どうしてここにっ!!」

そこには数百里離れたヨトウンヘイ

ムに居るはずのアナスタシアが立っていた。

「姉様から離れなさい!」

さらに横殴りの剣が、ロキを追い払うように振られた。ブリュンヒルデがそばにいなければ全力で叩き斬っていただろう。

「馬鹿な、お前は明日までは……」

「時間を飛び越えるなど容易なことあの程度の罠で私をどうにかできると思いましたか?」

「う、うそだろ……時間まで……操るなんて……」

想像を超えるアナスタシアの能力を目の当たりにし、ロキも動揺を隠せなかった。

「……よくも姉様を……絶対に許しません」

床に倒れ伏しているブリュンヒルデに目をやる。普段はいがみ合う姉妹だが、本当は誰よりもお互いを思っているのだ。

「ぬう、許さないならどうする?! ハックをくらええええッ!」

ロキの双眸が赤い光を放ち、その直後アナスタシアの身体は自由を失う。

「く……なんですか……これは……?」

細めた瞳が自分の身体に絡みつく縛索の呪術を捉える。ゴスロドリレスの上から魔術の鎖が十重二十重に巻き付いて、まるで蜘蛛の巣に掛かった蝶のよう。

「ヒヤハハッ! どうだ、ユミルの能

力を得た俺様の術は。破れまい!」

「なるほど、これがユミルの……」

ビキイイイインッッ!

だが次の瞬間、まるで衣類に付着したほこりを払うように、アナスタシアは呪縛の鎖を引きちぎっていた。無効化された縛索術が赤い燐光となつて、漆黒ドレスの女神の周りをキラキラと舞い散る。

「ひいひいッ! そ、そんな馬鹿なあああッ!」

「古代の邪神の力を借りてこの程度ですか。弱い……ッ。まったく……ッ! お話になりませんね」

剣を構えたままジリジリとロキに迫る。六枚の翼が聖なる輝きを放った。

「地獄に落ちなさい!」

大上段に構えた剣を振り下ろそうとしたその時、何かがロキとの間に立ちふさがった。

（姉様ッ!）

夢遊病のような虚ろの表情のまま、両手を掲げてロキをかばおうとするブリュンヒルデ。

「くっ! そこをどきなさいッ!」

「ヒヤハアアアッ! チャンス到来いっ!」

ロキがまなじりをつり上げて絶叫すると同時に、地下牢獄全体がズズンッとして揺れた。床や壁が大きく波打ち、足もとの石床がドッと崩れる!

「なっ!!」

巨大な落とし穴が出現し、アナスタシアは翼を打ち振って緊急回避する。

「姉様、あぶないッ!」

だがブリュンヒルデが呑み込まれようとしているのを見て反転、無我夢中で飛び込んだ。体当たりで姉の身体を押し出したが……。

「うっ……」

伸びてきた無数の暗紫色の触手が脚に絡みつく。吸盤で密着し、穴に引きずり込もうとする。

「こんなモノ!」

迷わず聖気を漲らせた剣を振りかざし、触手の束に突き立てる。だが

バチバチバチイッッ!

「きやああッ!」

凄まじい電撃を浴びせられてアナスタシアは絶叫を上げた。あらゆるモノを切り裂いた覇剣ヴィザールが弾かれ、逆に反撃を食らうとは。

「ヒヤヒヤヒヤ。無駄だ! ユミルの触手はユグドラシルの根と融合している。お前達ユグドラシルを守護する女神には、決して傷つけることはできないのだあ」

勝利を確信し、ゲラゲラと嘲笑するロキ。

「うう……ユミル……こんな化け物……」

「クハハッ! 知らなかったのか? ユミルは元々ここ、ユグドラシルの根の下に封印されていたんだよっ! それを手に入れるために俺はわざと捕ま

ったのださ」

「なんですつて……」

「なにすつて……」

登場人物紹介



アナスタシア

主神オーディンの養子。ヴァルハラ兵団ワルキューレヴァクターの指揮官を務めるアスガルド王国最強の女神。

ブリュンヒルデ

主神オーディンの実子。アスガルド王国の第一王女であり、アナスタシアの義姉。王国軍の将軍として民を守る。

ロキ

亜人の男。アスガルド王国への復讐のため、催眠術「ハック」を操りアナスタシアとブリュンヒルデを徹底的に陵辱する。

前号までのあらすじ

邪悪なる巨人族から神々の国、アスガルド王国を守護する女神の姉妹、アナスタシアとブリュンヒルデ。だがしかし、亜人の男

ロキの操る催眠術「ハック」によってブリュンヒルデは身体も精神もロキに支配されてしまう。アナスタシアもロキの翼にめめられたが……。

「うあああああつ！」
ロキが指を鳴らすと、さらなる電撃

太古の邪神が聖なる世界樹の下に眠っていたなど、アナスタシアですら知らない事実だった。
「さあ、復讐の第二幕の始まりだ、まずは処女膜をぶち抜くう！」
ロキの声に反応して男根のような淫猥な触手がアナスタシアのスカートに潜り込み、聖域に迫った。
「私に触れることは許しません！」
パキインッ！ 聖なる火花が散って触手が弾かれる。アナスタシアの体内から発せられる聖気が、防御フィールドとして邪悪を寄せ付けないのだ。
「ヌヌヌ。そう簡単にはいかないから別の手を使うまでっ」
「うあああああつ！」

「え……ああつ！」
目の前には透明なガラスの筒のようなモノがあり、その中にアナスタシアが閉じ込められていた。触手によって両手は背中に、両脚は開脚状態で拘束され、Y字の逆さ吊りという無残な姿

「ユグドラシルの地下です。あれをご覧なさい」
「え……ああつ！」
目の前には透明なガラスの筒のようなモノがあり、その中にアナスタシアが閉じ込められていた。触手によって両手は背中に、両脚は開脚状態で拘束され、Y字の逆さ吊りという無残な姿

「ブリュンヒルデ様、起きてください」
「ううっ……ここは……？」
揺さぶられて意識を取り戻すブリュンヒルデ。気がつくとき光沢のある黒革に乗せられていた。細い革紐が左右から乳房を挟み込んで、Fカップの豊満な乳房をくびりだしている。両手は背後で拘束され、両脚もピッタリと吸い付く革製のロングブーツに包まれ、赤ちゃんのオシッコスタイルのように開脚させられていた。
聖域はパンティと呼ぶのものはばかられるほど小さな革紐が、縦に一本食い込んでいるだけで、ほとんど丸見えの状態だ。
「ユグドラシルの地下です。あれをご覧なさい」

「はうう……そこに触らないで……あひいっ……胸はダメエッ」
淫紋を刻まれたブリュンヒルデの乳房は恐ろしいほど敏感になっており、クリトリスに匹敵する性感帯と化していた。触手に乳首を軽く吸われただけ

「……な、何をやる気なの!?」
「すぐにもアナスタシア様を犯したいところですが、まだ聖なる守りが強くて手が出せないので。なので、ちよつと手伝いをしてもらいますよ」
その間にも、先端がヒトデのように広がった触手がブリュンヒルデの乳首とクリトリスにピタリと吸い付いた。
チュッ……チュッ……チュッパッ！
「はうう……そこに触らないで……あひいっ……胸はダメエッ」

「もちろん生きていますよ。これから洗脳と改造を施し、アナスタシアお嬢様を忠実な奴隷に作り替えるのです。姫様と同様にねえっ」
ズルッ……ズルッ……ズルズルッ。
ロキの身体から怪しげな細いイソギンチャクのような触手が這い出してきた、ブリュンヒルデの身体に巻き付けていく。
「……な、何をやる気なの!?」
「すぐにもアナスタシア様を犯したいところですが、まだ聖なる守りが強くて手が出せないので。なので、ちよつと手伝いをしてもらいますよ」
その間にも、先端がヒトデのように広がった触手がブリュンヒルデの乳首とクリトリスにピタリと吸い付いた。
チュッ……チュッ……チュッパッ！
「はうう……そこに触らないで……あひいっ……胸はダメエッ」

「ヒヒヒ、アナスタシアお嬢様のオマシコだ。やつぱり、ちつちやくて可愛いですなあ」
薄桃色の粘膜が左右に菱形に広がり、真珠のようなクリトリスや花弁のような小陰唇、そしてまだ誰の目にも触れていない処女の入り口などが暴き出されてしまう。

「あ、ああ……そんな……」
アナスタシアに取り憑いた触手の一部がショーツを横にずらして可憐な花園を露わにする。ヘアが一本もないツルツルのスリットは、穢れを知らない聖処女そのものの清潔さに溢れている。左右から押し寄せた初々しい秘肉が生み出すワレメは深く、開脚にもかかわらず、ピッタリと閉じ合わさっていた。そこを触手が強引にくつろげていくと……。
「ヒヒヒ、アナスタシアお嬢様のオマシコだ。やつぱり、ちつちやくて可愛いですなあ」
薄桃色の粘膜が左右に菱形に広がり、真珠のようなクリトリスや花弁のような小陰唇、そしてまだ誰の目にも触れていない処女の入り口などが暴き出されてしまう。

好評発売中!

「これはなんとも可憐な。見るからに処女といった感じですねえ」

「や、やめてっ！ 妹には手を出さないで！」

「自分で尻に掛けたくせに、今更遅いですよ」

触手の上から乳首をギリギリと揉み潰す。

「ああうっ！」

操られていた時の記憶はハッキリ残っており、罪悪感が胸を締め付ける。乳首をつねられる痛みさえも、その贖罪のように感じられ、我慢しなければならぬような気がした。

「おや。乳首とクリちゃんがつぶれてきましたよ。フヒヒ」

「ああ……うそ……ああううっ！」

触手の中にはブラシ状の毛がびっしり生えており、それが吸引するたびに乳首と陰核をゴシゴシと擦り上げてくる。淫紋によって敏感になった身体にはたまらない刺激だった。

「いいですよ。その調子だ。触手も元気になってきました」

不気味な触手が何本もアナスタシアの身体に這い寄っていく。

「まずはカワイイお口からですよ」

「んぐぐ……っ」

桜の花びらのような唇をこじ開けて、野太い触手がねじ込まれていく。食道にまで達しているのか。か細い喉が盛り上がりつつググッと反る。

「味覚を交換して、精液が大好きになるようにします。感度も上がって、や

がておしゃぶりだけでイクようになるでしょう」

「な……なんてことを……」

ロキの老獺で変態的な発想に驚かさず、ブリュンヒルデは言葉も失った。

その間に別の触手がアナスタシアの聖域へと。狙われたのはなんと尿道と肛門だった。

「あ……う……う……むうっ」

真珠を連ねたような数珠状触手が、尿道と肛門に一つまた一つと埋まっていく。異様な感覚に襲われるアナスタシアの美貌が、バイザーの下で苦しげに歪んだ。

「尿道とアヌスも最高の性感帯へ作り替えます。オシッコやウンチをしただけで感じまくるくらいにね」

さらに別の触手は耳の穴へとねじ込まれる。

「もちろん身体だけではありません。羞恥心や牡への畏怖、奴隷の本能を植え付け、絶対服従するように洗脳するのです」

「そ、そんな恐ろしいこと……許しません！」

自分とは次元の違う、あまりにもおぞましい改造計画を知らされて、ブリュンヒルデの身体は水を飲んだようにブルブルと震えた。

「許さないとか言いながら、オマンコを濡らしているのは、どこのどなたですかな」

耳の裏から首筋、肩へと至る優美なラインに舌を這わせながら、ロキの指

がブリュンヒルデのヴァギナを擦り上げる。クチキュッと音がして、粘っこい愛液が指先を濡らした。

「オッパイをいじられたくらいでこんなに濡らすとは。大事な妹君が改造されるというのに浅ましい姫様だ」

「う、ああ……私は操られて……」

自分のせいでアナスタシアを巻き込んでしまい、心は切り裂かれるように痛んだ。それなのに肉体は勝手に燃え上がり、憎い男の責めを甘受してしま

う。乳首もクリトリスも充血して赤く尖り、媚肉も大量の蜜を溢れ返らせていた。

「うまく尻に掛けたご褒美をあげましょう。ヒヒヒ」

両膝を抱いてブリュンヒルデの身体を持ち上げ、M字開脚の中心に剛直を突き立てていく。

「ああ……い、いやああっ」

苦痛を訴える叫びとは裏腹に、散々犯された身体は、呆気ないほどスムーズに剛棒をくわえ込んでしまった。

「んくう……あああああ……っ」

ズブリと奥まで貫かれて仰け反る金髪の処女神。膣道をこじ開けられる圧迫感や最奥を挟まれる衝撃は、相変わらず大きいのだが、痛みがほとんどないことが、却って恐ろしかった。

「もっと感じるのです。感じれば感じるほど、アナスタシア様に注がれる淫のオーラが強くなりますからね。次はピアスですよ。ヒヒヒ」

アナスタシアの陰核にクワガタの牙

のような触手が近づくと、左右からパチンッと挟み込んだ。

「んぐううっ！」

激痛に叫ぶ声も触手に塞がれ、くぐもった悲鳴にしかならない。すぐに金色のピアスが穴に通され、接合部がガチッと潰され、二度と外せなくなる。

「これでアナスタシア様の神霊力は数百分の一に減退されます。なんといても六枚羽の女神だ、念には念を入れたいとねえ」

さらに二つの愛らしい乳首にも、呪わしいピアスが施されてしまう。

「お、お願い……これ以上は……」

冷酷に進んでいく改造を見せつけられて、ブリュンヒルデは血の気を失う。このままではアナスタシアの女神としての力は失われてしまう。

「姫様が感じなければ良いのですよ」

「そ、そんな……ううっ……だめえ……抜いてっ……あああ……」

ズンズンと突き上げられるたび、子宮がせり上がり口から飛び出しそう。触手に吸い付かれた乳房もタブンタブンと激しく揉み込まれ、白い乳肌の上で赤い淫紋が生きているように波打った。

「姫様ももつと腰を振ってください。オマンコをギュッと締め付けて、チンポを気持ちよく搾ってくださいよ」

ロキの声が鼓膜を通過し、絶対の命令となって脳を揺さぶる。胸の淫紋が赤く輝いて……

「んああ……こんな浅ましいこと……」

兵士用
便所じゃ
ないかつ

なんで
こんな
所で!!

では
個室の便座の上
おしり丸出しで
しゃがんでください

な…なんで
そんな事!!

うぐっ
魔法道具が
姫様を求めて
いるぅ〜

わかった
やるから!!

いつでも
どこでもって
約束したじゃ
ないですか♥



原作・二次元ドリーム文庫
1~2巻好評発売中!

このゲスがっ

これでいい
のかっ!!

おほっ
完ペキ
ですっ

絶対殺して
やるっ…

モ

ん

エルフの国の宮廷魔導師になれたので
姫様に性的な悪戯をしてみた
THE COMIC
第7話

ときまるよしひさ 原作 磯貝武蓮
時丸佳久 [キャラクター原案] 成瀬クリスティアノート

あらすじ
エルフのお姫様ナイアに魔法を教えるという口実でエロ調教をする外道
魔導師キース。その悪行に感づいた護衛騎士アイシャは主を守るため、
キースを殺そうと試みるものの逆により取り込まれて……!?

では♥
いただき
アナル!!

どこって
お尻の穴ですよ
気持ちいい
でしょ?

どこを舐めているっ

いいわけ
あるか!!
尻の穴なぞっ

そのわりに
舐めるたびに
ピクピクして
気持ちよそそ
ですよ??

やめてくれっ
そこは…っ

ちがうっ
ちがうっ

そんな事
言っておまんこ
ぐちよ濡れ
ですよ？

うっ嘘だっ

ニチャ

濡れて
なんかないっ

気持ちよくなんか
なっていないっ!!

じゃあ
確かめ
ますよ

あるえ？
アイシヤ様あ

おまんこの中
ぐちよぐちよじゃ
ないですか？

嘘ついたから
お尻ペロペロ
続行♡

ちゅっ

ひゃあ

ひゃあ

ひゃあ

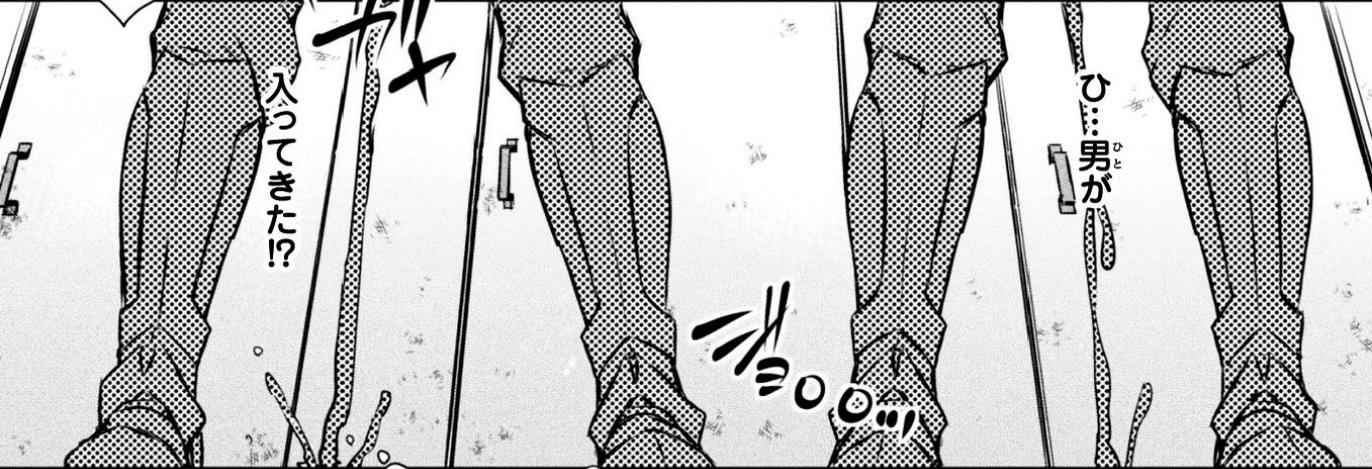


おー漏れる
漏れるっ!!

こんなので
イキたくな...

!?

ガッ



入ってきた!?

ひびく
男が

ひびく



今夜飲みに行こーぜ!!

おう!
あの店
行くか!

おいっ
人が...

入ってきちゃい
ましたねえ~

どうしましょう

もほっ

もほ
はめほっ

えっ
ハメるん
ですか?

ははは

ははは

ははは

外に人が
いるのに…

なんて
いやらしいんだ
アイシヤ様は

もしこんなところ
バレちゃったら
どうなっちゃうい
ますかね？

エルフとはいえ
兵士って粗暴な
連中ですから

肉便器とか言って
輪姦されちゃうかも

ひっ!?

そんなのっ

いやだあつ

おねがい…

やめて…

ああっ
またっ!!

ウンですっ
大丈夫
ですって!!

ひっええっ
ひっええっ
ひっええっ

きつと凄い事
されますよ?
い…
いや…

ひっええっ
ひっええっ





前線と後宮、一將軍と王妾
戦場の情勢が変化する中
思い人との距離はどんどん離れてゆく――

魔剣士 リネの

乙女穢されし戦場

【第10話】 邪悪と勇氣

原作 / まくらカバースoft
小説 / さかいひとし 酒井仁 挿絵 / きりしま 桐島サトシ
ILLUSTRATION

1
（そろそろ国境の戦況が気になる。早く前線に戻らねば……）

今後の兵站線や負傷者の撤退、魔物に憑依されたヒッピア軍が襲ってきたときの人員配置……それらを全て整理し、ウォードやランドルフに報告を終えたアレスは、最後に聖王バロックに出陣の挨拶をすべく、後宮に向いた。あの日……バロックに犯され、悦びに悶えるリーネを見て以来、後宮には二度と行きたくないと思っていたが、これは將軍の責務だ。そも、バロックは政務にほとんどかかわることなく、一日の大半を後宮で過ごしている。

苦い気持ちを抱えたまま、後宮に向かうアレスを迎え入れたのはシンシア。その姿を見て、アレスはハッと息を呑んだ。「まあアレス將軍、聖王陛下にご用事ですか」

「は、はい」
なんと青い髪の美少女はいつものポリューミーな体型がくつきり見えるドレスではなく、ゆったりとしたマタニティドレスを着ていたのだ。アレスの視線に気づいたシンシアは、少しはにかんだように微笑む。

「ええ、私もようやく聖王さまのお世継ぎを孕むことができました。まだお腹はそれほど目立たないのですが、今からこのドレスに慣れておこうと」
「そう、ですか」
この幸せそうな笑顔ときたらどうだ

ろう。それはシンシアが心の底からバロックの赤子を妊娠したくてたまらなかつたという証拠だ。

「聖王さまに出陣の報告ですね。さあ、こちらに」

シンシアの案内でアレスは三度後宮の奥部に足を踏み入れる。

香が焚かれ、誰の目にも晒されることのない、聖王のためだけの空間。薄いカーテンの前に導かれると、その向こうに人の気配を感じた。

「ああ、バロックさまあ……」

「ふふふ、そんなに舌を突き出して、お前は何か欲しいのだリーネ」

気配は二つ、バロックとリーネ。

リーネは熱に浮かされたように舌つたらずの口調で、ぴちゃぴちゃと舌なめずりをしているようだった。

「バロックさまのお、聖王陛下のおちんぽが欲しいです……早くリーネも、ベアトリスやシンシアのようにバロックさまの赤ちゃん孕みたいんです」

うつつらとカーテンに浮かぶ影から察するに、リーネは大柄な男の股間に顔をうずめ、しきりに舌を使っているようだった。

そしてこの後宮において男は基本的に聖王しかない。

（リーネが……あんな媚びるような声を出すだなんて）

ルートヴィヒが存命だったころ、まだ聖王でなかったバロックは戦闘に参加するでもなく、ただ不平不満を漏らすだけの男だった。

リーネはそんなバロックのセクハラ発言を聞かされるたび、嫌悪感を隠さずともしなかつたはずだ。

そんなリーネがいまや自分から進んでバロックの陰茎に舌を這わせ、その子を孕みたいと甘え、せがんでいるのだ。

先日、アレスの目の前でバロックに犯され、よがっていたリーネの身も心も、いまや完全にバロックのものになつてしまったということか。

「れるっ、ぴちゃ、ぴちゃ……ああ聖王さまのおちんぽおいひひれす。しょっぱいおつゆがじくじく滲んで、ああん、お口の端からこぼれちゃう」

「剣の国の女王ともあるう女が、なんともはしたないことだな。そう言えはお前と共に戦場で過ごしていた男のことはもうどうでもいいのか？」

「ふあ……？ らつて、リーネがこの世で最も愛しているのは聖王陛下下れすから。バロックさま以外の男なんて、もうどうれもいんれすう」

カーテン越しにうつつら見えるリーネの頭が激しく上下すると、「ぐっぶ、ぐっぶ」と濡れた音が寝室に響く。

口の中、いや喉奥まで陰茎を呑みこみ、舌で、唇で、喉粘膜でバロックの茎を刺激しているのだ。娼婦ですらないような淫らな奉仕に、アレスは口中が乾くのを感じる。

もう自分の知っている女騎士士はここにはいない。その事実を見せつけられつつも、アレスは己のイチモツが硬く

硬直するのを感じずにはいられない。

「バロックさまあ、この硬くて立派なおちんぽで、リーネに種付けしてくささいっつ」

「よしよし、む……そこにいるのはシンシアか？」

カーテンの向こうの気配に気づいたのか、バロックが声をかけると、シンシアは満面の笑みで「はい」としとやかに返事をする。

「聖王陛下、アレス將軍が出陣されるこのことで陛下にご報告にいらつしやつてます」

「ふむ、それは大儀であつたな、アレス」

ぎしりとベッドの軋む音がして、カーテンの向こうに大きな影が揺れる。姿を現した聖王は何も身につけていない下半身を恥じることもなく、堂々たる半裸身をアレスの前に晒してみせた。

その向こうには呆けた表情で舌なめずりをしている金髪ツインテールの美少女。その瞳にはバロックしか映ってはいない。

「戦況の方はどうだ、そろそろヒッピアを滅ぼせうか」

「は、しかし連中の背後に何やら不穏な空気があり、なお心してかかりたいと思います」

うむ、とバロックはまるで他人事のように頷く。

「では引き続き、ワシのため、この国のために粉骨碎身するのだぞ。ではも

う行ってよいぞ」

「そつげなくそれだけ言うと、バロックは踵を返す。」

金髪の美少女は待ちかねていたように自ら股を開き、聖王を迎え入れようとしていた。

「待たせたな、リーネ。今日もお前の子宮に我が子種をたつぷりと飲ませてやるぞ」

「ああつ、聖王さま、はやくう、聖王ちゃんぽでイカせてくださいーっ」

シンシアは相変わらず笑みを絶やさぬまま、そつとカーテンを引く。

カーテンで閉ざされたとはいえ、その向こうで何が行われているのか、アレスにはわかり過ぎるほどわかつていた。

「ふああああつ、入つてきます、バロックさまのおつきなちゃんぽ、おまんの奥まで届いてるつ。子宮突き上げられちゃうーっ」

「今からそんなに気をやつては身が持たぬぞ。心配せずとも、お前が氣を失つても犯し抜いてやるからな。お前は今幸せか、リーネ？」

「し、あわせれすう、リーネは、リーネは世界一幸せな女の子れすう。あひいい、イク、入れられただけでもうイッちゃいますうううう！」

気がつけばアレスはリーネの嬌声を聞きながら、ざりつと唇を噛みしめていた。

だが、アレスにはこの場を立ち去るよりほかに何もできなかったのであつた……。

た……。

ダイヤモンドシテイを発つて数日後、アレスは再び国さかいの最前線に戻つていた。

カシムを喪い、一時は勢いを弱めていたヒツピア軍だが、エルヴィンの報告によると再び攻勢を強めているらしい。

「というより、ヤツら以前よりも必死で攻めてきているんだ。そして……これを見てくれ」

「これは、またはや魔武具か」

魔武具に魅入られた敵将はどうにか討ち取つたものの、後にはやはりおぞましい邪気を伴つた鎧が残されていたのだ。

「ミュリエルもご苦労だったね。エルヴィン、ミュリエルとセリアを伴つて魔武具を王都に持ち帰つてもらえないか。キミらはずつと最前線で戦い通しだろう」

たしかに連戦に続く連戦で、エルヴィンたちにも疲労の色が見える。

しかし、セリアが前線に残ると言い出したのだ。

「リーネさまが戻つてこない以上、これ以上戦力を削るのは得策じゃありません。それに……アレスさんのこと、心配です」

一度こうと言ひ出したらセリアは決して自分を曲げることはない。それはブルデイ島を出るときからわかつてい

た。

やむを得ず、アレスはエルヴィンとミュリエルに魔武具を託し、自ら陣頭指揮を執ることにしたのだつた。

翌日、エルヴィンたちは負傷した兵を伴つてダイヤモンドシテイに向かつていた。

「ミュリエル、気づいていたかい。アレスは明らかにヘンだつた」

「ええ、それにリーネさまたちも戻つてくる様子もないし、王都で何があつたというのかしら」

しかし補給線を確保し、負傷者を国に戻すことも、魔武具を浄化することも重要事。アレスの身を案じつつも、エルヴィンは魔武具を携えてワインバーグ神官長を訪ねた。

「または魔武具がヒツピアの手に……やはり背後に魔族の謀を感じますな。この鎧は一際邪気が強い。おそらくシンシアさまでないと浄化は無理でしょう。直ちに取りはからいませう」

「そうしていただけると助かります。ところでシンシアさまやリーネさまは今どちらに」

そこで初めてエルヴィンはハイランドの同盟三国の女王たちが、バロックの後宮で過ごしていることを聞かされたのだ。

（あの噂は本当だったのか。アレスの様子がおかしかつたのも、そのためだろうか）

その後、エルヴィンは雑事に追われ

ることとなつたが、シンシアによつて魔武具は無事に解呪され、「聖鎧オリオン」を手に入れたのだつた。

（この聖武具が少しでもアレスの力になつてくれればいいのだが）

ときを同じくして、最前線の戦場でアレスはセリアと共にヒツピアの撃退に追われていた。

「セリア、あまり突出するんじゃない、キミは後方からの支援を！」

「は、はいっ」

狩人として超一流でも、セリアはともと兵士ではない。しかし今少女を突き動かしているのは、アレスがいつになく沈み込んでいるからだつた。

（私に少しでもできることがあれば。アレスさんの力になりたい）

その日もどうにかヒツピア軍を退けることに成功したアレスたちは、見張りを強化するとともに兵たちに十分な休養を取らせることにした。

総指揮官であるアレスは、砦の一室を使つている。兵たちの目がないうところだと、さすがのアレスも張りつめていた気が緩み、大きく息をつく。

体力的には余裕があるが、若き將軍の心は倦み疲れていた。脳裏からはバロックに犯され、だらしなくよがっているリーネの姿が離れない。

（いや、もう少しだ。ヒツピアの脅威が去れば、この国も大陸にも平和が訪れるだろう）

しかし、そのときバロックの傍らには聖王の子を孕んだ三人の女王がいるに違いない。それに魔族の動向もまだ判明していない。ここで気を抜くわけにはいかないのだ。

と、そのときアレスの私室にノックの音が響いた。

「あの、アレスさん。少しよろしいでしょうか」

「ああ、セリアか……つて、セリア、その姿は」

その薄手のドレスに、アレスは見覚えがあった。

ブルデイ島でセリアに世話になっていたころ、アレスの部屋に忍んできた少女が着ていたのは、いつもの狩人の服ではなく、ポディラインがうつすら透けて見える愛らしくも色気のあるドレスだったのだ。

「アレスさん、お疲れのようですので、寝酒をお持ちしたんです」

テーブルには果実酒の瓶とグラス、そして簡単な軽食が並べられていく。小さなテーブルをはさんで、しばし二人きりの時間が過ぎてゆく。

その真剣な眼差しを見れば、セリアの自分への気遣いは痛いほどわかる。よもや後宮での出来事をセリアには言えないが、目の前の少女に少しでも応えてやりたいと思う。

「私、最近弓技の鍛錬をしているんです。以前、マルティナさまにマナが強いつて言われたから、少しでも戦力になればって思つて」

リーネの聖剣技とまではいかないが、たとえ王族でなくとも強いマナの使い方次第で強力な技は使いこなせる。

そしてなによりハイランドの——いやアレスのために鍛錬を続けているのだろうと思うと、胸が熱くなる。

「情けないな、俺は。セリアにはいつも心配をかけてばかりだ」

「そんなことありません！ アレスさんが民のため、平和のために戦っているのはみんなが知っています」

もちろん私も……と、少女は恥ずかしそうに眼をそらし、ポツと頬に朱を刷いた。

「だから……アレスさんほもつとみんなを、いえ、わ、私を頼ってください。私にできることがあれば、どんなことだつて」

そう言うとき少女は薄布のドレスの前をはだけてゆく。形のいい膨らみとつんと尖ったニップルが、小さな灯に照らされている。

「セ、セリア」

「いいんです、アレスさんにだつたら何をされたつて」

セリアはアレスの手をとると、そつと乳房に押し付けさせる。その肌はたしかに火照つていて、心なしか汗ばみ、心臓の高鳴りが伝わってきた。きそうだ。

「私にはこれくらいのことしかできないから。アレスさん」

「うっ」

少女の手がアレスの股間に伸びてきた。甲冑こそ着ていないが、戦闘服の

前の部分は既に膨らみかけている。

温かく柔らかな手の平が、その膨らみを優しく、愛おしげに撫でさする。その手つきは決して巧みではなく、少女が男慣れしていないのは明白。

「失礼しますね」

少女の指が動き、ズボンの中から青年の茎を取り出す。細く白い指を茎の根元に絡めると、ぎこちないながらも上下にそれをしごく。

「う、うむうっ」

思わず快美の声が漏れる。アレスとて若く健康な青年、しかも戦いに次ぐ戦いで、欲望を発散できる機会もなかったのだ。

セリアの手の中で、それはたちまち天を仰ぐ。

「あ、熱くて硬い、です」

一軍の将として、こんなことをしていいののかという思いはあつたが、アレスは少女の手を振りほどくことができなかつた。

されるがままに勃起茎をしごかれると、なんともいえない心地よさに身を任せてしまう。

「アレスさん、どうぞ、そちらのベッドに」

導かれるままに、アレスはベッドの端に腰をおろした。するとセリアは足元にしゃがみこむと、おもむろに陰茎の裏筋をねぶり始めたのだ。

湯のように温かな少女の口の中の感触に陶然とすると、少女は根元を指でしごきながら、先端部分を丁寧にしゃ

ぶり始める。

「ど、どうですかアレスさん。き、気持ちよくなれてますか。私うまくできていますか」

「ああ、すごく気持ちいいよ。うっ、そんな奥までっ」

さすがに喉奥までくわえこむのは苦しいのか、時おり咳き込みつつも舌や唇での刺激を止めようとはしない。

その顔を見ているとバロックの陰茎をしゃぶるリーネのアへ顔が一瞬思い出されたが、セリアの真っ赤に染まった顔は決して欲望に飲み込まれていくわけではない。

（そんなにも、俺のことを思つてくれているのか）

愛おしさが胸にこみあげてきて、アレスは少女の美しい茶色の髪を優しく撫で続ける。

「アレス、さん。アレスさんのためなら、私どんなことだつて」

感極まったように、少女はがばりと身を起すとアレスに抱きついてきた。そうしてアレスの太腿に跨ると、腰を淫らにくねらせ始める。

「ああアレスさんっ、アレスさんっ」

ブルデイ島で一夜を過ごしたときは、セリアの処女を奪うまでは行かなかつた。しかし今のセリアは目を潤ませ、明らかに欲情している。

すらりと引き締まった下肢の付け根の花びらは、女の汁で満たされているに違いない。

「私なんか、アレスさんにはふさわし

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>